

# モンゴル研修報告書 2010

## 2010 Study Tour, Mongolia



関西学院大学総合政策学部上野研究室

2010 年度研究演習 I

School of Policy Studies, Kwansei Gakuin University

**UCRCA** アジア都市コミュニティー研究センター  
*Urban Community Research Center for Asia*



## 目次

はじめに.....	1
1. 研修日程.....	3
2. 研修内容.....	5
Lecture1: 在モンゴル日本大使館.....	5
Lecture2: 新ウランバートル国際空港建設プロジェクト (New Ulaanbaatar International Airport Construction Project)について.....	7
Lecture3: JICA によるモンゴル Master plan について.....	9
Lecture4: モンゴルにおける置き薬について.....	10
Lecture5: 病院見学.....	12
Lecture6: Japantown.....	13
Lecture7: 58 番学校訪問.....	15
Lecture8: 15 番ホロ事務局訪問.....	16
3. 2010 年度 Community Building Youth Leadership Project 報告.....	18
4. 調査報告.....	34
4-1. 政治外交チーム報告書.....	34
4-2. 環境衛生チーム報告書.....	38
5. ホームステイ記録.....	43
6. おわりに.....	56
名簿.....	57

## はじめに

### ——研究演習担当教授からのメッセージ——

上野研究室は 2006 年に初めてモンゴル研修旅行を行い、その後 2007、2008 年、2009 年 2010 年と、5 年にわたり研修を重ねてきました。2010 年はこれまでの蓄積の上に立って、大きな飛躍をしました。それはこれまでの学びと研修から、私たちの出来る働きかけ、小さくもひとつの行動を起こして、持続性につながる「機構」をつくり出したことにあります。この報告書と合わせて、2010 年 11 月に関学三田キャンパスで行ったモンゴリア・ウィークの報告書、また遡って各年度の報告書を読んでください。

繰り返しになりますが、確認しておきたいことですが、私のゼミ生への基本的な教育の信念は、生涯学び考え、行動する人間、関学のモットーである「地球市民」になってほしいことにあります。それを中長期の達成目標・アウトカムとして研修旅行を行っています。

私は大学卒業後四十余年、横道や回り道をしつつ、そのときそのときどう生きるか生きていか、何が自分に出来るのか、何を自分に課すのか、学び続け、考え続けてきました。

関学に来た 2005 年以前の 20 年ほどは、主に米国ワシントンのシンクタンクで「政策研究」に従事しました。厳しい米国での研究生活のなかで、私は「市民社会」「デモクラシー」「政策」といった、人生をかけて希求する価値のある課題と出遭いました。今、私がこの年齢をもって、大学教育の場で出来ること、果たせる責任の一つは、若いあなた方が、人生に追求すべき、生涯の学びの課題を発見するのを助ける、そうした機会を揃えることであると思います。

その機会として、出来るならば学生は大学卒業までに、一度でも外の社会を見、学んでくることが大事だというのが私の確信です。日本以外の国、外の世界を知ることによって、よさも悪さも、強さも弱さも含めて、私たち自身と日本自身を知ることができます。そして私たちにとって価値あるものと、他の国や人々にとって価値あるものは違うということ、異なる価値があり、そして異なっていること、違いの中から違いを超えて互いに得るものがあり、国境を超えて、新たなよりよき価値の形成ができるということを学んでほしいのです。

モンゴル研修では、1 年目でおおまかなモンゴルの状況、ウランバートルの状況を把握しました。そしてことに都市政策関連ゼミとして、途上国の都市住宅問題が喫緊の取り組むべき問題であることを認識したのが 2006 年度の成果でした。

この問題解決のためにミクロで有効なことが何かを探ってみようと思ったのが 2007 年の研修活動と調査の焦点でした。援助に関わるさまざまな機関と責任者の方々からの講義を受けました。都市問題と住宅問題の基本を都市居住の原点、：コミュニティーに置くことが非常に重要であることが、開発理論からでなく、踏査を通じて見えてきました。

2008 年度には、日本の JICA による都市マスタープラン研究を知り、その中でことにモンゴル科学技術大学の Purev-Erdene 先生のゲル地区改良の提案と活動に出会い、これへの

貢献を考えた調査を行いました。この関係を土台に 2009 年度の調査は、コミュニティーの現状と問題を、子供たち、小中高学生の GIS を使った生活圏調査から探ってみることとしました。これは今後のすべての援助及び社会改革のカギとなる、コミュニティー・ビルディングということ、すなわちコミュニティー形成と内発的開発、住民による、住民のための、住民の計画と参加、プロセス、過程をつくりだしていくことが最も大事な行為であるという理念に立ち、私たちが出来る、働きかけの一つとしての調査でした。

2010 年 3 月には限られた関係者のみでしたが、各年夏の間となる冬季調査を行いました。零下 25 度 C のウランバートルを訪ね、冬季の都市問題を実感することになりましたが、このときに 9 月調査のためのカウンターパートを作り、加えて、ゲルを購入しました！

この経過を経て行われたのが 2010 年の研修旅行です。特に今回の調査活動にはコミュニティー開発青少年リーダーシップ・プログラム (Community Building Youth Leadership Program) を、Zorig Foundation の協働のもとに 58 番高校でクラブ活動としてスタートさせました。この経過は 1 部この報告書にまとめています。これが今後のゼミ活動の核となるといえます。

この研修にご協力いただいた日本大使館城所大使、エンフチロン大学の今先生、講義、講師の方々、資料提供くださった方々、そして今や研究パートナーとなってくれた Zorig Foundation の Badruun Gardi さん、多くの日本語通訳から運転手さんまで、皆様に心から感謝いたします。

## 1. 研修日程

### 9月1日

- 13:35 関空発 (KE724)
- 15:30 李君、劉君到着
- 19:10 仁川発 (KE897)
- 21:40 ウランバートル到着
- 23:30 ホテル到着

### 9月2日

- 9:30 在モンゴル日本大使館訪問
- 14:00 観光 (ガンダン寺・ゲル地区など)
- 17:00 Zorig Foundation にて各研修グループごと作業

### 9月3日

- 9:00 58番学校訪問
- 14:00 新空港プロジェクト (梓設計)  
訪問&Zorig Foundation にて作業
- 18:00 マスタープランについて  
長山さん、小澤さん、安陪さん
- 19:30 モンゴル料理店にて長山さん、小澤さん、阿部さんと食事会

### 9月4日

- 11:00 市内巡回 SKY、ピロシキ購入、川辺にて昼食
- 16:00 テレルジ着 乗馬、羊の解体見学、バートルさんの講義
- 19:30 夕食にて鯉口さんの講義

### 9月5日

- 10:00 山登り、遊牧民のゲル見学
- 15:00 テレルジ出発
- 16:30 ホテルにて話し合い、アンケート準備など 各自夕食後 ポスター、プレゼンの準備

### 9月6日

- 10:00 58番学校へ出発 打ち合わせ
- 11:40 学校給食
- 12:30 プレゼン開始
- 14:00 ポスター・ゴミ拾い下見
- 15:00 用具買い出し
- 21:00 ミーティング

### 9月7日

- 11:00 58番学校へ出発
- 12:00 学校給食
- 12:45 ゴミ拾い@学校横の川
- 15:30 Zorig Foundation で各チーム作業
- 21:00 ミーティング

### 9月8日

- 9:00 エルフオルチロン大学へ出発
- 9:30 大学到着 交流&アンケート
- 14:00 日本人墓地へ
- 17:00 ゲル地区の住宅へホームステイ  
or 置き薬の話 内田さん

### 9月9日

- 11:30 ホテル着
- 13:30 アンケート調査 and  
58番学・15番ホロ見学
- 16:00 アンケート翻訳作業
- 20:30 ミーティング

### 9月10日

- 9:30 ジャパンタウン見学
- 13:40 病院見学 (国立第1病院、第3病院)
- 15:30 買い物
- 19:00 石庭 エンクトゥーヤさんと会食
- 23:00 誕生日会(勝基さん、李君)& 打ち上げ

#### 9月11日

8:30 李君、劉君ホテル発  
11:00 日本人運動会  
23:10 ウランバートル発 (KE868)

#### 9月12日

03:10 仁川着  
09:45 仁川発 (KE724)  
11:30 関空着

### 食事

モンゴルの伝統料理としてボウズという羊肉の料理がある。日本でよく食べるシュウマイのような料理である。羊の肉は独特の風味があり、日本人の口にはあまり合わないと感じられた。モンゴルでは、羊肉が一番安価であり、鶏肉が一番高価な肉とされる。比較的安価ではあるが、羊肉はいろいろな料理に入っており、遊牧民の人々は自分で羊を捌くことができるそうである。我々は宿泊したテレルジで羊の解体を見学したが、大地に血を落とさず、命をいただくということを再認識させてくれる経験となった。また、坊主と同頻度で振る舞われた飲み物としてモンゴル茶（ツーツァイ）というものがある。モンゴル茶は、モンゴル茶の葉、牛乳、塩を煮詰めて作る日本のミルクティーのようなものである。しかし、ミルクティーと違い甘くなく、塩味の強い飲み物であり、現地で飲んだものは正直なところあまり美味しいとは感じられなかった。

モンゴルのスーパーには多くの輸入品があり、近隣国であるロシア、中国、韓国、日本の製品が多く見られた。特に野菜や魚、スナック菓子などは、ほぼ海外からの輸入品であるという現状であった。

また、モンゴルには、多くの日本人経営の料理店があり、寿司、ラーメン、ちゃんこ鍋、うどん屋などがあげられる。日本料理屋は、価格設定が高く月給2万円のモンゴルにおいて日本食は高価な食べ物であるという印象である。

### ホテル施設

ウランバートル市のスフバートル広場の近くにあるCMDホテルに10日ほど滞在した。第一印象では、ホテル内は旅行客を受け入れる為のものであるため、比較的きれいで設備はしっかりしているように感じられた。しかし、ドアの立て付けや温水がでない等というトラブルが多々発生し、モンゴルのインフラ設備の不十分さを直に体験する機会となる。室内には、3名程度が滞在可能なベッドがあり、エアコン、テレビ、など日本と変わらない設備が整っていた。それらの電化製品は中国製であった。ホテルにフロントはなく夜間は看守が滞在するシステムをとっているようであった。また、ホテル1、2階には、レストランがあり、我々は朝食時に利用していた。レストランでは、パンや目玉焼き、サラダなどの西洋風な朝食が用意されていた。

## 2. 研修内容

### Lecture 1: 在モンゴル日本国大使館

場所：在モンゴル日本大使館

講師：城所卓雄氏(駐モンゴル日本国大使)

日時：2010年9月2日9:30～10:30

在モンゴル日本国大使館

Embassy of Japan in Mongolia:

Olympic Street, Sukhbaatar District,

Ulaanbaatar



#### <在モンゴル日本国大使館>

宿泊ホテルから徒歩15分程の所に位置し、周辺にはモンゴル国外務省、ブルガリア大使館、韓国大使館等がある。

#### <大使館構成>

大使：城所卓雄

総括：日野耕治 参事官

総務・政務班、経済・経済協力班、広報・文化班、領事・警備班、官房班

#### <大使館訪問まで>

大使館を訪問するにあたり、8月1日より在モンゴル日本国大使館大津清子氏と連絡を取り合った。上野研究室モンゴル研修概要、大使館訪問経緯及び目的等を連絡し、訪問の依頼をした。

訪問に際して、モンゴル研修概要書、訪問者リストの提出が必要であった。研修概要書については、2010年モンゴル研修で行う調査・研修概要、大使館で伺いたい内容事項を中心にまとめた。なお、訪問者リストは警備上の観点から提出が必要であった。

#### <城所卓雄大使のレクチャー内容>

事前に提出していたモンゴル研修概要書での質問事項が多岐にわたるとのことで、城所大使からレクチャーをしていただいた。以下、その内容である。

#### (1) 日蒙外交関係

日本とモンゴルは、1972年に外交関係を樹立し、1977年に初の対モンゴル経済協力として「ゴビ・カシミア工場建設」を実施した。同工場は現在でも国営工場として操業を続けており、モンゴルの外貨収入に大きく貢献した。

その後、1990年にモンゴルが民主化されるまでは、特に目立つ経済協力は行われなかった。これは、冷戦が一因である。

モンゴルが民主化・市場経済化されて以降、これに伴う混乱と様々な問題に対し、日本は対モンゴル支援を表明、また、各国に支援を呼びかけた。現在に至るまで、日本は常にモンゴルのトップドナーとして、経済、教育、農牧畜業、保健・医療等、様々な分野の支援を行っている。

日蒙の外交関係は良好であり、モンゴル政府は日本が行ってきたモンゴル援助に対し、非常に感謝を示している。阪神淡路大震災、新潟県中越地震時、モンゴル政府はいち早く援助を行った。これは、日蒙が築いてきた関係の良好さの表れであり、城所大使が感動した出来事の一つであるようだ。

## (2) モンゴルにおける日本文化・日本語

日本文化がモンゴルで認知されており、寿司、天ぷら、柔道等の日本語が浸透している。また、忍者は貧困者という意味に解されている。

大使館では、モンゴル国民の対日意識の向上、相互理解の促進を目的に、文化事業の主催や後援、日本に関する情報発信等を行っている。

## (3) 城所大使が考える今後の日蒙関係・外交

城所大使が考える外交とは、困った時に助け合う国家間関係を構築することであるようだ。また、情報を迅速、正確に収集し、今後の2国間関係を考えることが重要であるとのことだった。

現在、日本・モンゴル EPA(経済連携協定)締結に向けての交渉等、益々の関係強化が見込まれており、両国の国益を互いに高め合うことが望まれる。その中で、優れた技術を持つ日本企業の支援、参加が重要な役割を果たすと考えておられた。

## <大使館訪問後>

大使館訪問、大使との面会等、非常に有意義、貴重な時間を過ごすことができた。

モンゴル研修終了後、研修報告、帰国報告を兼ね、お礼の連絡をした。大津氏より、研修生の今後の活躍を労う旨の連絡をいただいた。

在モンゴル日本国大使館「対モンゴル経済協力概況」,

<<http://www.mn.emb-japan.go.jp/jp/kankei/keikyou.htm>>, 2010年12月1日.

(文責：黒田 裕子)

## Lecture 2: 新ウランバートル国際空港建設プロジェクト (New Ulaanbaatar International Airport Construction Project)について

講師：前田氏

日時：2010年9月3日 14:00~

### <プロジェクト概要>

この新空港プロジェクトは、梓設計とオリエンタルコンサルタントの二社によるジョイント業務のもと行われている。スタッフは建設業者も含め、現地の企業や労働者を下請けとして雇っている。建設費総額は 288 億円ととても大きなプロジェクトで、そのすべてが円借款で提供される。2006 年から動き出し、2015 年 12 月の開港を目指しプロジェクトは進んでいる。現在、首都ウランバートルから南へ 10 キロメートルのところに、チンギスハーン国際空港があるが、空港の南東に山脈があり、その影響で北西方向のみからの離着陸になるため、風向きなどの天候の影響を受けやすく、欠航率が高い。そのため、就航率 (Usability) は 86%と低く、改善が求められることとなった。新空港の予定地は現空港から南に約 50 キロメートルのところに位置し、地形的に平坦で、横風のないところである。施設としては二層式のターミナルで、出発と到着がフロアで仕切られており、人・物の動きがスムーズになるような設計である。滑走路は 3600 メートルでフェーズ 1 には 19 のスポットがあり、B737 以上の飛行機のために 6 つのゲートが用意される予定である。

### <展望>

上でも記したように、現空港での就航率は 86%であるが、新空港では 98%と推測されている。また、現空港では国際線・国内線を含め、年間 60 万人の利用に対し、新空港は開港から 10 年後には 170 万人規模の空港になる事を見込んで、プロジェクトが進められている。この規模は日本の大きな県庁の空港レベルに匹敵するものである。さらに長期的には第二滑走路も計画中で、その場合、年間の利用者が 5~600 万人に達するとされている。また、韓国やロシアとの新たな路線を開拓する協定の締結に向けての動きもある。このことからわかるように、このプロジェクトの経済的効果は大きい。さらに新空港建設に伴い、空港付近に Airport City と呼ばれるコミュニティーの構築が計画されており、空港関係者の住居や宿泊施設に始まり、ゆくゆくは商業施設の建設も考えられている。この空港に限ったことではないが、交通の便が悪いモンゴルにおいて各地に空港が開発されるということは、人・モノが行きかい、さらには鉱山開発が活発化するなどと『お金』も行きかうようになるため、非常に大きな影響力を持つ。

### <問題点>

新空港の開発には、経済的影響などのプラス面もあるが、同時にマイナス面の影響も避

けては通れない。主に課題として挙がっているのは、以下の三点である。

a) 現空港の利用方法

新空港の開発により、既存の空港の利用方法が課題として残っている。日本では商業施設に変わることもあるが、空港の立地が首都ウランバートルから遠いことなどから、今の段階では、新空港と現空港をそれぞれ国際線と国内線専用の空港とする案が有力である。その他の案としては、現空港を政府関係者等の要人のための空港にする案や、観光用飛行機の発着、農薬散布用飛行機の発着に使用する案がある。

b) インフラ整備

空港開発は進んでいるが、周辺のインフラ整備については遅れており、まだまだ不十分である。というのも、都心部への道路整備、通信・電力や航空燃料の運搬設備等の費用はすべてモンゴル側の負担となっているからである。

c) 環境問題

新空港開発における最大の問題点は環境問題である。問題の種類は様々であるが、一つには、空港で使用される水のために井戸を掘ることを検討しているが、枯渇が懸念されていること。同時に排水処理の問題も抱えている。寒いモンゴルでは、暖房設備がとても重要であるが、石油の採れないモンゴルにおいて、燃料は石炭が一般的である。しかし、これにより排気の問題が浮上してくる。排気の問題は都心部でも深刻な問題となっているが、空港においては煙による飛行機への影響も考えられるため、安全面からも慎重に考える必要がある。

<最後に>

新空港の開発は、モンゴルにとって非常に大きな影響を与える。インフラ整備や環境問題等、まだまだ対策が不十分な点は数多く残っているが、これらはモンゴルが今後発展していくに当たって、乗り越えなければいけない課題だと感じる。日本の円借款による資金提供に頼るだけでなく、それを有効にできるようにモンゴルという国自体が、より深く考えること、また日本のさらなるアプローチも必要になってくるだろうと考える。今回、プロジェクトについて説明を受け、日本とモンゴルの結びつきの新たな側面が見えたと共に、これからの日本の関わり方を考えさせられた。しかし、これはモンゴルだけでなく、世界各地の発展途上国における日本による援助の仕方、空港開発の与える影響の大きさを考えることにもつながった。

(文責：藤元 惇一)

## Lecture3:JICA によるモンゴルウランバートル市都市計画マスタープランについて

講師：長山 勝英氏、阿部 朋子氏、小澤 邦彦氏

場所：Zorig Foundation

日付：2010年9月3日

### <内容>

3人のそれぞれのマスタープランに関するお話と、JICAが行うモンゴル国都市開発実施能力向上プロジェクトについて、資料とパワーポイントを使用して説明を受けた。以下はその内容である。

・長山氏(バリュープランニング・インターナショナル代表取締役)

マスタープランを2007年から3年かけて作り、2009年に提出した。マスタープランは都市計画のルール作りが基本である。日本の憲法29条に基づいた、土地収用法の中の「公共の場を使うことができる」という部分を使用した。またモンゴルの憲法である、「土地の利用は国が責任を持つ、土地の使用が不当な場合、国が制限できる」というものを一つのツールとして使用した。マスタープランの大事なポイントは次の3点である。1.個人の能力 2. Organize 3. 政府。また、現在多く建っているゲルをアパートに建て替えることや、老朽化しているアパートの建て替えも大切である。マスタープランの疑問点として挙げられるのが、日本だけの制度経験でいいのかという点である。それに対しては、基本的には日本の制度経験を活かし、対応しきれない部分に関しては自分たちに合うよう変える。また、カウンターパートナーの支えになる形でやるということである。

・小澤氏

地域の関係性が疎遠であるので、地域の関係強化が必要である。

・阿部氏

日本はリーダーがものを言う。一方、発展途上国は色々な人がものを言う。

### <説明の内容>

ウヌル、ダンバダルジャの住民が望む生活環境は、安全な道路、生活に必要なユーティリティ、近隣の公共施設や空間、広くて快適な住宅、働けて楽しめる商業・娯楽施設である。また、ゲルエリアの人々は、昔から住んでいる所であるので、最低限の設備があればこの場所に住みたいと考える。

このプロジェクトを実行するにあたって、必要なことは、1.区画整理 2.市街地再開発 3. アパート共同住宅 4.建て替え住宅である。建て替え住宅を建設するにあたって、モンゴルではタウンハウスが適していると考えられる。なぜなら、熱効率が良いからだ。また、モンゴルは社会主義であったので元々はトップダウンである。よって、住民は何もしなくてもいいという意識が強い。その意識を変えることがこのプロジェクトを成功させるために

は重要であると考えられる。また地域住民と政府、民間事業者の連携も非常に重要である。

(文責：横山 千尋)

#### Lecture 4: モンゴルにおける置き薬について

講師：内田氏

日時：2010年9月8日 17:00~

##### <はじめに>

まず、置き薬というシステムについて触れておきたい。置き薬とは日本の富山県を発祥とし、300年の歴史を持つ昔なじみの医療システムのことである。方法としては、まず世帯ごとに緊急箱のような薬の入ったキットを配る。そして、定期的に配った世帯に訪問し、使った分の料金を支払ってもらい、使った分の薬を補充するという「先用後利」のシステムである。

このシステムをうまくモンゴル伝統医療と融合させ、事業実施団体としてモンゴルの伝統医療普及事業を行っているのが、モンゴル政府公認公益法人「ワンセンブルウ・モンゴリア」である。私たちはその一員で、事業に携わっている内田氏に幸運にもお会いすることができ、話を聞くことができた。会談時のメンバーは上野教授、島末さん、島末さんの娘さんのひとみさん、上野研究室研究生である井原、黒田、劉の計6名である。以下は内田氏が話された内容である。

##### <内田氏の経歴>

- ・ 82年～ 大阪外国語大学モンゴル語学科(現大阪大学外国語学部モンゴル語学科)卒業
- ・ 84～85年 在学中一年間、内モンゴルに留学・卒業後4年間ツアー会社で働く(モンゴリアツアー)
- ・ 94～96年 カシミヤ事業に携わる・1～2年間遊牧の調査
- ・ 04年～ 置き薬事業に携わる

##### <置き薬事業が始まるまでの過程>

2001年にナンバリン・エンフバヤル首相(当時：現大統領)が訪日の折に日本財団笹川陽平理事長(当時：現会長)に会見し、モンゴル国の社会開発のために財団の支援を要請したことに始まる。笹川理事長の快諾により、モンゴルにどのようなニーズがあるのか財団による調査が始まった。その結果、民主化以降モンゴルでは伝統文化の復興の動きがあることに注目し、人々の役に立つと思われる伝統医学の普及促進というアイデアが生まれたのである。様々なアイデアが浮かんで消えていき、最終的に日本の置き薬方式を活用したモンゴル伝統医療普及事業が誕生した。準備期間を経て、事業は2004年1月から開始

され、その実施団体として日本財団の助成金で「ワンセンブルウ・モンゴリア」が設立された。

#### <置き薬事業の現在までの経過>

前項の通り事業は開始されたが、必ずしも順調とはいかなかったようである。内田氏の話によると、政府からの妨害もあったという。利権が絡む話であるのは言うまでもないが、「現地の人間でない者」が始めた事業という点も障壁になったという話であった。しかし、妨害にもめげず普及活動を続けた。その結果、現在では一万世帯以上に置き薬を置くまでに至った。更に、回収率は80パーセントを超えているそうである。始めた2004年度の回収率が20パーセント前後なことを挙げれば、この驚きも決して大げさなものではない。数年の間に結果を出すことができたということももちろんであるが、何よりも重要なのは、発展途上国でこのシステムが機能しているという事実だ。大抵の途上国の場合、薬自体が高価であるために、ほぼ闇市場に流れてしまう。仮に保有し続けたとしても、その回収率は思うように上がらず、数年間でパーセンテージが跳ね上がるということは考えにくい。故に、内田氏や他のメンバーの努力が窺えるというものであろう。その努力の結果、政府にも徐々に認められるようになったそうである。現在団体のメンバーに保険省の職員がいることが、その何よりの証拠である。

#### <モンゴル版置き薬について>

モンゴル版置き薬キットについても触れておきたい。薬は全てモンゴルの伝統医療を利用したもので、チンギスハーンが世界征服した当時に起源がある。中国医学と似通っている部分もある。特に漢方と似ているようである。現代医学における我々が普段触れている薬との一番の違いは、主に予防に効果を発揮するという部分である。風邪になったから飲むというのではなく、風邪になりそうだから飲むというのが正解のようだ。現代西洋医学の恩恵にあやかっている我々には少し有難味が薄いようにも思えるが、この薬の一番の利点は、薬が強すぎないことである。伝統医学故に元来からモンゴルにあるものでほぼ作られているために、体にも悪くないというわけだ。そして、薬の評価自体はきちんと医師がモニタリングするというシステムになっている。尚、1キット約13000tg（約1000円程度）となっている。キット内の置き薬の内訳と効用は、実物が説明文と共に研究室に保管・展示してあるので、ここでは省かせて頂く。

#### <おわりに>

元々、この会談は予定になかったものである。我々がスーパーに行った折に内田氏に会うことがなければ、このような重要な話を伺うこともできなかった。今、海を越えモンゴルで普及しつつある置き薬というシステムは、WHOにもモンゴルでの成功が認められ、「モンゴル・モデル」として世界の途上国へと広がろうとしつつある。実際に、タイでは保健

省がタイの伝統医薬品を使って同様の置き薬事業を始め、カンボジア政府、ラオス政府も後に続こうとしている。内田氏も近々カンボジアに行かなければならないと話されていた。日本の古き良き文化が、途上国では貧しい人の役に立っている。これは今後の日本文化を発展途上国に売り出す際にも役に立つのではないだろうか。

(文責：井原 史章)

## Lecture 5: 病院見学

場所：国立病院、私立病院

日時：2010年9月10日

### <はじめに>

今回私たち上野ゼミ生は、島末さんとその娘さんのひとみさんと一緒に国立病院と市立病院を見学することが出来た。国立病院には島末さんの他、井原、上家、黒田、西堂、劉が同行し、通訳にはエンフオルチロン大学のトヤ先生がついて下さった。また、私立病院にはホロに同行しなかったメンバーが二つに分かれて別々の病院に訪問した。しかし、病院の案内して下さる方の都合上、片方のグループは一つの病院は見学することが出来なかった。

### <国立病院>

まず、モンゴルの国立病院では建物自体はかなり老朽化していたが、医療機材はすべて最新の外国から供給されたものであった。例えば、人口呼吸器はドイツ製であった。しかし、消毒液はモンゴル産である。国立病院では疾患の患者だけを受け入れ、交通事故などの患者は他の病院へ。院内には伝染病患者専用の隔離部屋があり、伝染病がはやると初療の患者の部屋が個室になる。また、急に停電した場合、自家発電機も整えてあるので、停電しても心配はない。内科の機械の数は十分であり、病室のベッドごとにカーテンがつけられていた。実は、初めは個々のベッドにカーテンはついていなかったが、日本の病院を参考にしてベッドをカーテンで仕切るようにしたそうである。術後の患者のための電気も毛布もあって、冷蔵庫には薬剤もある。病院は1970年にモンゴルで出来た最初の大病院である。

その他に、ベッドの数は450床、750名のスタッフでその内320名が看護師である。機器の数も十分であった。

医師の制度としては、医科大は6年制であり、研修は二年ある。合計8年間の期間を経て専門スタッフになる。しかし、実際は国内の研修では機器の使い方の教え方などが不十分であるため、海外に研修へ行く医師がほとんどである。ちなみにこの国立病院の場合、

医師17人の中で12人が女性である。

この病院では午前中は患者を診て、午後は入院患者を診ることになっている。また、注射器の数が少ないため、使いまわしもある。

#### <私立病院>

次は私立病院であるが、建物が二つで350床ある。7階建ての建物は内臓を治療するところになっており、5階建ての建物は手術をするところである。この病院は2007年に設立されたもので、100%モンゴル人の費用により建てられた。また2009年に増築し、二つ合わせて500床になった。ただし、150床はまだ工事中である。この病院はモンゴル国内の私立病院で一番良い病院である。よって、モンゴルの大統領や政治家もこの病院で治療を受けるそうである。また、会社の健診で来る患者さんもいるようである。英語を話せるスタッフは全体の80%である。約30人の患者に4人の看護師がついている。しかし、田舎の病院には医者が足りないという現状があり、救急車も非常に少ないということである。

また、私立の学校では内科健診がある。モンゴルでは日本と違って病気が重くなってから病院に行くそうだ。現在、モンゴルの私立病院の問題としては教育と医療問題である。

(文責：李 鳳国)

### Lecture6: Japantown

講師：

場所：モンゴル Japan Town

日付：2010年9月10日

#### <概要>

Japantownとは建設会社「スルガモンゴル」が建設・経営している88万㎡の住宅街である。ウランバートルの郊外に位置している。

#### <事業内容>

Japantownはスルガモンゴルが、モンゴルに日本レベルの住宅街を建設するという構想のもとに建設途中の高級住宅街の呼称である。コンセプトの「緑を感じることでできる街づくり」の意を込め、「Four Seasons Garden」の名前が付けられた。

#### <外観>

ウランバートル、ウランバートル周辺で私たちが見た建築物とは外観が明らかに異なっていた。(図-1,図-2 参照)。モンゴルでは建物を建築する際、階段の段差や廊下の幅などの

測量を正確に行わないため、日本の建築物と比べると劣る箇所が多く見られた。(バリア・フリー化されていない)

しかし Japantown の建築の際には、日本人が中心となって設計・土木を行うために日本と変わらない品質を持った住宅街が建築されている。例えば、気温差が約 40 度と激しいモンゴルでは、舗装道路に使用されるコンクリートの品質にも高技術が求められる。ウランバートル市内の舗装道路は、激しい気温差によってひび割れている箇所が多く見られた。しかし、Japantown 敷地内ではそれが見られず、後に 110 度の気温差にも耐えられるコンクリートを製造・使用している事を教えられた。また、停電が頻繁に起こるモンゴル市内で、安定した電力を確保するために、敷地内に発電所も完備している。



(図-1) Japantown 外観



(図-2) ウランバートル郊外外観

#### <建設にあたって>

建設作業は一般的にマイナス 7 度以下で行うことが不可能とされる。モンゴルでは冬季が長期間に及ぶため、4 月～7 月までは建設作業を行うことが不可能になる。そこで、スルガモンゴルでは「プレキャスト工法」と呼ばれる用法を用いて効率よく建設を進めることを可能にした。(「プレキャスト工法」とはあらかじめ壁や床を工場で製造し、現場で組み立てるのみの工法)

#### <今後について>

日本円にして一世帯約 5000 万円という値段から、Japantown に住む人のほとんどが企業の経営者、ショッピングモールのオーナーなど、高所得者が大多数を占めている。ゆくゆくは Japantown の内部に病院やショッピングモール、インターナショナルスクールの建設・導入も視野に入れている。



(図-3) Japantown 将来の構想図

(文責:中谷 昌彦)

## Lecture7: 58 番学校訪問

講師：ハンダ氏（58 番学校長）

場所：モンゴル Japan Town

日付：2010 年 9 月 3 日・9 日

CBYL プログラム、Clean up 活動について約 1 時間ハンダ校長先生と話し合いを行った。また、学校の現状についてもホロ調査の前に伺うことができた。

メンバー 多田・奥村・山見・中谷・岡田

### <Clean up 活動>

私たちが提案した高校生との活動について助言をいただいたのは以下の 2 点である。

1. 当初予定していた 2 日間の Clean up 活動を 1 日で行うこと。

私たちは対象の 11 年生以外の学生であってもできるだけ多くの学生にゴミ拾い活動の経験をしてほしいと考えていたが、ハンダ先生の判断により 11 年生のみを対象に行うこととなった。したがって、予定していたより生徒数が少なかったため、一度にプレゼンテーションと Clean up 活動を行うことになった。

2. プレゼンテーションの参加を先生に促していただくこと。

私たちがクラブメンバーの対象にしたのが 11 年生であり、彼らは午前で授業が終わるようだったため、授業後にそのままプレゼンテーションを受けてもらえるよう、現地の先生による呼びかけを行っていただいた。

### <CBYL プログラム>

校長先生から 1 つ提案によると、11 年生を対象としたこのプログラムを小中高と 3 つ作り、それぞれの成長段階に合ったプログラムを実施することで、将来のモンゴルの発展により貢献できるのではないかということであった。しかし、私たちの考えでは、まず 1 つに対象を絞り、彼らの成長を見守ることが今 1 番にすべきことであると考えていた。そしてその活動から成長の可能性が見えた時、校長先生のおっしゃったシステムを取り入れていければ良いと考えている。

また、彼女は学生に「生きる力」を身につけてほしいと考えており、そのために日本の教育を参考に考えていきたいとお考えであった。

### <学校の現状>

・道徳の時間については、1 週間に 1 時間設けられているようだ。ただ、この時間がすべての学年に対して与えられていない点、またカリキュラムについては国で定められておらず、学校独自の方法で行っている点が問題点として挙げられる。そのため教科書はなく、

先生が本から引用した資料などを使用しているということであった。教師がどのように道徳の授業を行うのかさえわからないという問題点もある。

- ・学習全般に関して、政府の影響が非常に大きいそうだ。基本的に「知識を詰める」ことに学習の重点を置いているため、総合学習のような「考える」学習が軽視されている。
- ・地域ぐるみで学校を支援しようとする PTA のような団体があり、彼らによる周辺の清掃活動や給食の手配がなされている。

(文責：岡田 真由香)

## Lecture8: 15 番ホロ事務局訪問

場所：15 番ホロ事務局

日付：2010 年 9 月 9 日

15 番ホロ事務局とは、スフバートル地区における複数の行政機関のうちの一つである。日本で言えば、村役場などに相当するものだと考えられる。今回、上野教授とゼミ生 3 名で 15 番ホロ事務局を訪問した。2000 年から 10 年間ホロ長を務める D.バルジンニャム氏にお話をお伺いすることができた。以下はバルジンニャム氏に 15 番ホロ地域についてお聞きした内容である。

### <15 番ホロにおける支援>

15 番ホロ地域において JICA によるプロジェクトが行われた。(JICA 報告書参照)

また世界銀行による NAAST というプロジェクトも 2007 年より行われた。これはゲルではない戸建住宅 80 の住居に対して下水道を設置するというものだ。2010 年 10 月より使用開始となった。今後は暖房を設置するためのプロジェクトが行われるようだ。

### <15 番ホロの住人の生活状況>

現在 15 番ホロ地域の人口は 9140 人で、2160 世帯数ある。この数字から 1 家族の人数は 4.2 人となっている。また貧困家庭と最貧困家庭を合わせると 650 世帯になり、全世帯に対する経済的に困難な家庭は約 3 割を占めている。中所得者の月給が約 3300 円なので、低所得者はそれ以下の月給となる。

またこれらの家庭はゲルという移動式住居（元々は遊牧民族であった人々が使用していた住居）に住んでいる。ゲルには水道などのインフラが整っておらず、凸凹の道を通り住民は給水所（15 番ホロ地域には 3 つの井戸がある。）まで水を確保しに行かなければならない状態だ。水を得る手段としては、1 リットル 3 Tg（1 円以下）で買うことができるが、ウランバートル中心地の価格 1 リットル 1 Tg に対しては若干高い。

さらに住民の負担となるのは、ゴミ収集代である。月に 1 度 15 番ホロ地域にやってくる

ゴミ収集車にゴミを回収してもらうのには 170 円負担しなければならない。低所得家庭に対しては特に大きな負担となることが分かる。月に 1 度しか来ないゴミ収集車と大きな負担が原因なのか、周辺を軽く見渡ただけでも数多くのゴミが散らばっている。

#### <15 番ホロにおける公的施設（病院や警察署、学校について）>

15 番ホロ地域には警察署や病院、学校などの公的施設がある。病院については私立病院と国立病院があり、動物病院も存在する。

また近年各ゲルにあるストーブによる大気汚染で住民の健康に被害をもたらしている。ゲルが密集する地域では、大量に排出される煙が問題となっているのだ。特にこの影響を受けているのが、体の機能が低下しているお年寄りである。

#### <行政のシステム>

地方分権が行われていない様子がかがえた。日本であれば各地方自治体が自身で持つ財が存在するが、ホロはそれを持っていない。資金が必要な際は、区に資金を要求しなければならない。ここで資金を得ることができれば良いが、得られなければホロ自身で何か行うことはできないだろう。このような TOPDOWN のシステムは、何か問題があった時にもすぐに対応することができない。直ちに BOTTOMUP のシステムに移行する必要があると考える。

#### 参考資料

スフバートル区「第 15 ホロの紹介」2010 年 12 月 11 日。

<[http://sbd.ub.gov.mn/index.php?option=com\\_content&view=frontpage&Itemid=2](http://sbd.ub.gov.mn/index.php?option=com_content&view=frontpage&Itemid=2)>

(文責：山見玲加)

### 3. Community Buiding Youth Leadership Project 2010 活動報告

#### 1. 2009 年夏期研修で見出した可能性

上野研究室では過去 5 年間、主にモンゴルの都市問題に対象に焦点をあてた調査を行ってきた。そして 2009 年度はゲル地区の第 58 番学校の 10 年生を対象に、都市問題についての意識があるかどうかの調査を行なった。この調査では彼らに自分たちの住む地域のマップづくりをしてもらい、生徒たちから地域の危険な場所や学校への通学路についての情報を聞き出し、地図に書き込んでいく作業を行う。調査の結果、生徒たちが危険や不安と感じる場所として、「ゴミ」「野犬」「酔っ払い」「大気汚染」があげられた。この調査から、単なる表やグラフではないかたちで、生徒たちがコミュニティの汚いと感じているところ、危ないと感じているところを視覚的に表現することができることを発見した。つまり彼らにはコミュニティの問題解決の大前提である「問題意識」「問題発見能力」をもつことを見いだせたのであった。

#### 2. CBYL プロジェクト概要

##### <実施背景>

この 2009 年度夏期モンゴル研修の調査報告により、上野研究室では、モンゴルの子どもたちが実際にまちづくりの主役となる可能性を見いだした。この可能性から、上野研究室では政府や海外の援助でのマクロなレベルの、都市問題解決、コミュニティ構築の革新ではなくこれからのモンゴルの未来を背負う、子どもたちに自らの住むコミュニティの問題解決の方法知識・機会を与えることで、モンゴルの発展に貢献できるのではないかと考えるまでに至った。そこで、現地 NGO・NPO である Zorig foundation、また過去 2 回のモンゴル研修調査対象として受け入れられた第 58 番学校と共同で、第 58 番学校の 11 年生を対象に、Community Building Youth Leadership (CBYL) プロジェクトを発足した。CBYL プロジェクトでは、この Zorig Foundation の職員である Badruun Gardi(Zorig foundation) 氏の発案・協力を経て実施されることとなる。

##### <プロジェクト目的>

プログラムのコミュニティづくりへの参加を通して、一人でも多くのモンゴルの高校生たちに自立的民主的的市民としての意識を育くみ、コミュニティにダイナミックなプロセスを作り出していくこと。

##### <活動方法>

コミュニティづくりの対象は学校周辺のダンバダルジャ (Dambadarjaa) 地区で、2009 年度の調査対象であった第 58 番学校の 11 年生を対象に行う。クラブ活動として行うプロジェクトの内容は、クラブの高校生と上野研究室の大学生との間のインターネット回線を駆使したコミュニケーションを通して構築される。研究室からコミュニティの問題解決に役立

つ情報や、コミュニティ形成に役立つツールを、高校生にも理解しやすいレクチャの形にまとめ、提供していく。また活動カリキュラムを研究室で作成し、それを参考にしたものを、Badruun氏がクラブで実施する。研究室側も、生徒たちの要望・意見、Badruun氏のフィードバックをコミュニケーション・ソフトウェアである Skype（スカイプ）を活動で実施し、プロジェクトの改善・補完を行っていく。



写真1 CBYLプロジェクトで使用予定の教室風景

出所： 上野研究室(2010)

<プロジェクトの対象者>

プログラムの対象者は 58 番学校に通う 11 年生（日本における高校 2 年生）とし、期間は卒業までの 1 年間としている。これは、実際にゲル地区に住む者を対象者とすることで、コミュニティー内からの問題提起者、またその解決案作成者といった、ゲル地区内での自治的な組織を育成するきっかけも見込んでいることへの理由でもある。

### 3. CBYLプロジェクト活動報告

#### ①2010 年度夏期モンゴル研修

2010 年 9 月 7 日、上野研究室のモンゴル研修でそのクラブの旗揚げイベントとして、第 58 番学校周辺の河原で清掃活動を行った。メンバーは、上野教授と研修参加学生 16 名とコーディネーター兼通訳の G.Badruun 氏、そして通訳のモンゴル人 4 名である。旗揚げ企画は 3 日を要し、1 日は 58 番学校側との打ち合わせ、2 日はプロジェクト誘致のためのプレゼンテーション、3 日はクリーンアッププロジェクトを行った。

<事前打ち合わせ・下見>

9 月 3 日に上野先生、筆者を含む上野研究室代表 8 人、Zorig F Foundation スタッフ 1 名、そして第 58 番学校校長、ハンダ先生と清掃活動の内容について詳細を決めるミーティングを行った。ミーティング内でクラブ活動に関して決定した事は主に以下の 4 つである。

- ①注射器・ビンなどの危険物も現地モンゴル人高校生に拾わせる。
- ②怪我、感染病予防のため生徒は全員軍手を着用する。
- ③当初 2 日間を予定していた清掃プログラムを 1 日で行う。
- ④清掃活動に生徒が参加するよう、事前プレゼンテーションの告知をクラス担任の先生方

に行ってもらおう。

事前に研究室の教育チームが予定していたプログラムでは、第 58 番学校が午前、午後と二部制に分けられているため、二度、プレゼンテーションを行う予定であったが、校長先生との話し合いにより、午前中に授業を終える 11 年生を対象に、放課後にプレゼンテーションを行うこととなった。また、当初の予定では、58 番学校生徒のすべての学年を対象にクリーンアップ活動を実施するつもりであったが、危険性・研究室のメンバーだけで多くの人数に指導をすることが不可能であるため、プレゼンテーションを実施する 11 年生を対象に限り、活動を行うこととなった。また、クリーンアッププロジェクトの清掃場所として学校前の河原を選んだ。理由としては、①学校の目の前にあるということで、学生を集めやすい。②活動結果が学生の目に映りやすい。ということが主な理由である。9 月 3 日に清掃活動を行う河原の下見を行った。清掃場所の河原の水は干上がっており、河原というよりも、道路のようであった。また、地域住民にもゴミ捨て場として認識されているようであった。ゴミの内容としては、ビン、カンなどの資源ごみや、野菜の屑や肉の骨などの燃えるごみと不燃ごみがまじった状態で大量に散乱していた。散乱したゴミを観察してみると、燃やされたものや、中には使用済みと思われる注射器や割れたガラスなど、直接手で拾うと危険なものや、触れるとかぶれる危険な植物が生えていることがわかった。第 58 番学校の先生と話し合った結果、危険なゴミはトングで拾うこととし、参加者は全員ビニール手袋の上に軍手を重ねて着用することとした。

#### I. CBYL プロジェクト誘致のためのプレゼンテーション

58 番学校にある多目的教室を利用して、①モンゴル人学生との簡単な交流ゲーム②日本についての説明③日本の高校生の生活の説明④昨年実施された調査結果⑤コミュニティ概念の説明⑥CBYL プロジェクト誘致のための説明、を行った。(写真 2, 3)この中でも④コミュニティ概念の説明では自分たちのすむまちが「コミュニティ」であることを定義し、日本の文化といえる公民館・お祭り・清掃活動の例をあげて「公共性」の概念を伝えた。また例として彼らにとっての公共の施設となる、くみ上げ式井戸の「キオスク」をあげた。このプレゼンテーションでは、自分たちの住むまちは自分たちでよくしていかなければならない、とゆう実際に CBYL プロジェクトでの住むまちづくりの根本となる「公共性の重要性」を伝えることを目的としたものである。また 2008 年度の研修から協力を得ているモンゴル国立科学技術大学の E.Purev-Erdene 教授が JICA との共同プロジェクトで作成したマスタープランの理想図を上野教授に説明してもらうことにより、ゲル地区において現在行われている開発を知ることと、また上野教授により子どもたち自身が、マスタープラン同様にまちづくりの主役であることを告げられた。プレゼンテーションを聞くことが出来なかった学生や、プレゼンテーションを思い出してもらうためにも、学校へ入ってすぐの廊下に、プレゼンテーション内容の模造紙を作成し、校内へ設置した。(付録 3)



写真3 コミュニティについてのプレゼンテーション風景

出所: 上野研究室(2010)

## II. クリーンアッププロジェクト

実際、昨年現地子どもたちの生活圏調査により問題のひとつとしてあげられた「ゴミ問題」にここでは焦点をあて、単純な解決方法として清掃活動を実施した。プレゼンテーション実施日の翌日に行い、任意の参加にもかかわらず、第58番学校の教員の促しの助けもあり、60名以上の学生を集め、実施した。(写真4)

<方法>学生たちに、ゴミ問題の解決をより視覚化してもらうために、小さな区画を清掃地点として行う。また分別の概念も教えるために、燃えるゴミ・燃えないゴミ・危険物と、分別を実施した。清掃時間は約一時間と、短いものであったが、対象区域を制限したこともあり、ほとんどのゴミを収集することが可能となった。(写真5)モンゴル人学生はとても精力的であり、進んでゴミを拾っていた。



写真4 クリーンアッププロジェクトに参加する58番学校生徒の風景

出所: 上野研究室(2010)

### 清掃活動における準備物

- ・帽子 (関西学院生着用)
- ・軍手 (清掃用)
- ・ゴミ袋 (清掃用)
- ・トング (清掃用)
- ・飲料 (懇親会用)
- ・菓子 (懇親会用)



写真5 掃除前後の風景

出所: 上野研究室(2010)

プロジェクトの感想文の一部である。

- ・日本人のみんなの成功を祈ります。
- ・また今度、このようなよいことをしてね。
- ・日本人のみんな、ありがとう！
- ・このような活動してくれた日本人に感謝します。
- ・ゴミを拾ってくれてありがとうございます。
- ・学校のまわりをきれいにすることは、うれしかったです。すごく気持ちいい。ありがとう。
- ・このような活動をしたことに感謝します。これから将来モンゴルが発展することを信じてください。
- ・きれいにすることは、すごくきもちよかったですし、嬉しかったです。
- ・自分の国をきれいにすることは、すごくうれしく思っています。感謝しています。
- ・環境をきれいにすることはすごく気持ちよかったです。ありがとう。
- ・環境を一緒に守ろう！
- ・このような活動を行ってくれた日本の大学生のお姉ちゃん、お兄ちゃん、ありがとう。

#### <考察>

全11年生の70%以上の生徒が活動に参加し、またこの旗揚げ企画から実際のクラブメンバーを募集したところ、初回の活動に18名の志願者がいた。このことから、このプロジェクトの需要はあるといえる。また、子どもたちの一部の感想からではあるが、自らが解決するという主体的なものではなく、「やってもらう」という受け身的な考え方が見られたと感じる。また始めは清掃中に行っていた分別ではあったが、実施中に生徒たちは、分別の知識が乏しく、また分別意欲も乏しいことから無作為にゴミ袋に廃棄している様子が見られた。このことから、子どもたちには依然としてゴミ問題を中心としたまちづくりの概念が乏しいことがわかる。課題としては、現地の人々の価値観が私たちの持っている価値観とどのように違うのか、具体的に知る事が出来なかったことがまず挙げられる。例えば、衛生的に危険である使用済みの注射器の清掃に関して、現地の校長先生は「生徒に素手でやらせても大丈夫である」と発言していた。しかし、使用済みの注射器を素手で扱うことは、衛生的にも危険であり、針が刺されば感染症を発症してしまう恐れもある。このように、現地との意見交換をよりスムーズに行い、最適な形で問題にアプローチするためにも、互いの持つ価値観を共有することが出来ればよかった。加えて、反省点としては、上野研究室の学生によって行われたプレゼンテーションがモンゴルの学生にとってどれほど理解できるものであったか、またクリーンアップ活動を通して、彼らの心にどのような動きがあったかを実際数値として統計をとるまでに至らなかった点があげられる。しかし、2010年のこの活動をもとに、上野研究室の大学生自身も、現地の子どもたちがもつ文化背景や価値観、実際のモンゴルの都市問題を目にするすることで、CBYLプロジェクトの必要性・子どもたちの現状を知ることができ、この経験の反省点や気づきをもとにカリキュラム作成を行っている。

## ②インターネット回線を通じた交流会

### <活動の概要>

CBYL プログラムの活動は、2010年10月20日からスタートした。現地時間午後1時10分から2時までの50分間で行われた。授業内容は、集まった18人の11年生に、Zorig Foundatin のスタッフが上野研究室のこれまでの調査の成果や、奨学金プログラムについてのプレゼンテーションを行った。そして、1学期の最終日である11月5日の現地時間14時から約30分間、集まった14名のCBYLメンバーと、上野研究室の大学生との間で、インターネット回線 Skype を使用した交流が行われた。本活動の際、日本在住のモンゴル人3名に通訳を依頼した。

### <活動内容>

具体的な交流の内容としては、まず、クラブのメンバー全員に自己紹介をしてもらった。そして次に、上野研究室の学生が、現地高校生に直接様々な質問を行った。クラブに参加した理由や、学びたい理由を尋ねた。「興味があったから」、「自分を成長させたかったから」、「自分自身で何かを作りたいと思ったから」、「社会活動を行う際、どのように調査、計画するのかを知りたい」といった回答が寄せられた。

### <活動から得られた成果と課題>

得られた成果としては、第58番学校にあるインターネットを使用できる教室を利用すれば、インターネットを通し、お互いの顔を見ながらスムーズにコミュニケーションを取れる事が明らかになった。また、お互いの顔を見ながらのコミュニケーションは双方に大きな好影響を与えることが予想される。援助を行う側にとっては、実際にプログラム参加者の顔を見ることで、援助を行う上で大きな自信になった。また、プログラムを実行してゆく過程でも、随時コミュニケーションをとることで、プログラム援助者と参加者のつながりを固めてゆくことは、円滑にプログラムを成功させる要因になると考えられる。

## 4. 総合の学習を手本として

このCBYLプロジェクトでは、効果的な育成のために日本の総合学習を参考にカリキュラム作成をする。教育カリキュラム作成に専門的知識のない上野研究室学生が総合学習を参考にした理由は2点ある。1点目は、CBYLプロジェクトの求める人物像が、日本の総合学習の教育方針と一致していること2点目は、モンゴルの教育のニーズが日本の総合の学習にあることである。

### <CBYLプロジェクト理念との一致>

総合的学習の性質と特徴から述べていきたい。総合的学習とは、横断的学習・総合的学習との課題学習を行う時間である。横断的学習とは、教科、領域の枠は変更することなく、共

通常の学習内容・単元を設定し、そこから教科相互の内容を積極的に関連付ける学習のことである。総合的な学習とは、その横断的な学習からさらに発展させて、生活・地域・社会・人類などの課題解決をねらいとして、子供の興味・関心を尊重して、教科枠を取り払い総合的に取り組む学習のことである。(図1)その背景には思考力・判断力・表現力等が求められる「知識基盤社会」の時代となる変化の激しい社会において、国際化・情報化といった社会問題に対応する人材育成が必要とされることにある。(高等学校学習指導要領改訂1999)つまり、日本の当時のカリキュラムの性質としていた暗記集中型のカリキュラムではなく、教科の枠を超えた学習が必要とされ、導入されたものである。ここで注目すべき点が、総合学習の活動指針である『自ら課題を見つけ自ら学び、自ら考え、問題を解決する力を育成する』(中央審議会第一次答申,1996)にある。この力は、現在の日本の教育方針であり、『生きる力』と称す。(図2)筆者は、この生きる力がCBYLプロジェクトの目的である「自立的にコミュニティづくりをする子どもたちの育成」に、合致していると考えた。総合の学習の実施背景にある、激動の社会を生き抜くための力を身につけることは、モンゴルの子どもたちにとっても、自らの地域で発生する問題を解決し、住みやすいコミュニティづくりをすることに合致する。よって、日本の総合の学習をCBYLプロジェクトの参考とすることとなった。

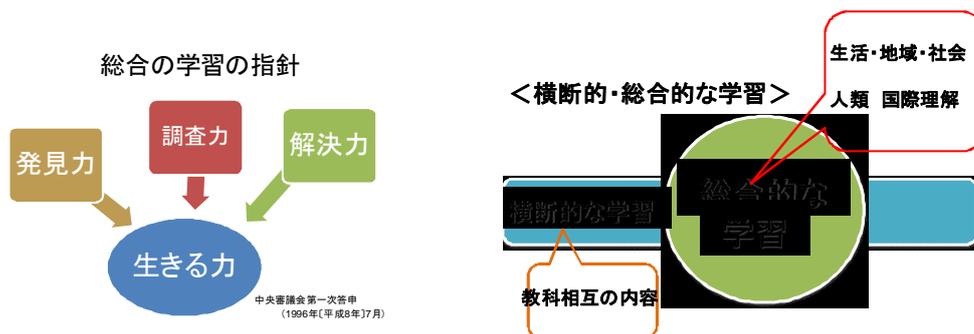


図 1.2 総合的学習のイメージ

出所; 石田(2009)

#### <モンゴルの総合学習の現状とCBYLプロジェクトの必要性>

続いて、モンゴルの総合の学習現状からみえる、CBYLプロジェクトの必要性について述べていきたい。モンゴルでは、現在すでに、「総合学習」の導入は行われている。モンゴルの教育界は、2005年9月から「新教育スタンダード」が導入され、総合学習、自然科学(総合理科)等、新たな教科が導入され、これまでの社会主義の教育をベースとした、暗記中心の指導法から、子どもたちの柔軟な発想や思考を促すような、「子どもの発達を支援する指導法」を授業に取り入れることが推進されている。(国際ボランティア 21, 2007)しかし、このモンゴルの総合学習は、実際に効果を果たしていない。私たちは2010年のモンゴル研修でモンゴルの教育の総合学習の現状を第58番学校長であるハンダ氏へ、インタ

ビュー調査を行った。

### I. 学習時間の不足

実際の教育現場では、「総合の学習」を行うための教科以外の自由時間は、国から週 1 時間与えられている。それに対して日本の教育課程では特別活動・総合の時間・道徳の時間といった教科外の活動時間は年間 70～105 時間与えられている。(学校教育法施行規則別表第 2, 2000) モンゴルではその 1 時間さえも、ほかの教科の補充の時間にあてられるなど、不確定なカリキュラム設定となっている。

### II. 教師の知識不足、資料不足

また教師は、教職課程で教員になるための勉強を受けておらずましてや「総合の学習」を教えるための教育も受けていない状態で教師自身も、何を教えるべきかが不明な状態で教育が進められている。「新しい教育方法の経験や技術、行政からの十分な指導がないので、どのようにして取り組んでいいのかわからない」(国際ボランティア 21, 2007)。とゆうのが実際の声である。日本の大学の教職課程からみても、専門的に総合の時間に特化した授業は 3 教科指定されていることから、総合学習についての専門知識に学ぶ機会が与えられるといえる。またモンゴルは総合の学習のための「道徳」等の教科書の配布は一切なく、本などを参考に実施している。

### III. 日本の総合の学習へのニーズ

以上のことから国の体制的にも、総合学習の教育にはまだ発展途上の段階であり、総合の学習の時間の導入が困難な状況にあることがわかる。よって、現在不十分である総合の学習の補完を行うためにも総合の学習のカリキュラムをもとに CBYL プロジェクトを行う必要があることがわかる。また、その必要性はインタビュー調査で日本への教育視察経験のある校長先生からの「生きる力」を身につけてほしい、ということばで、より強くさせるものとなった。



写真 7 58 番学校校長 ハンダ氏との対談

出所; 上野研究室(2010)

## 5. CBYL プロジェクト活動開始とこれからの問題点

### <カリキュラム編成>

実際に第 58 番学校では、2010 年 11 月 24 日から、CBYL プロジェクトが開始されることになり、上野研究室の学生もそれに合わせて、カリキュラムを提示する。上野研究室学生が提案するカリキュラムとして重要視したいのが、「段階的学習」である。これまで第 58 番学校の生徒たちが、総合学習の授業形態をおこなえてなかったことから、彼らの能力が依然として未知数であることから、必要である。この段階的学習とは二つのことがいえる。一点目は与えるテーマが段階的であること(図 1)、二点目は調査方法、発表内容、発表方法といった方法論が段階的であることである。(図 2)自発性の少ない課題から始め、調査力・発表力を育成し、そして、段階的に自発性の高い課題で、問題発見能力・解決能力を見出すというものである。例えば、当初の段階でテーマ設定を彼ら自らに課すのではなく、上野研究室学生が問題テーマを決定し与える段階からはじめることで、発見能力・調査力・解決能力を部分的に育成していく。またテーマにおいても、彼らの身近に存在する学校やホロや家庭などに焦点をあて、最終段階としては、コミュニティ・国・世界レベルのテーマを与えていきたい。段階的にすることにより、調査への意欲を高め、調査、発表のプロセスを理解することで、より発展的な活動が可能である。付録には実際に作成したカリキュラムを提示する。



図 3 CBYL プロジェクトカリキュラム作成のイメージ

出所： 上野研究室(2010)

### <CBYL プロジェクトの問題点>

CBYL プロジェクトが始動し、いくつかの問題点が浮上した。財政面、継続性と主に二つの点あげられるが、ここでは継続性について述べる。CBYL プロジェクトを通してまちづくりを行っていくうえで、まちづくりに必要不可欠となるのがその「継続性」である。一時的な問題解決を図るのでは、まちづくりの意義は果たせない。持続可能な社会と環境を目指して、漸進的な過程を経ながら地域社会を構成する、持続的な活動がまちづくりの

原則である。(日本建築学会,2005) CBYL プロジェクトにはこの持続性の面で様々な問題が起こる。その原因としては①モチベーションの維持②上野研究室の持続性にあると考える。上野研究室の学生のモチベーション維持が、CBYL プロジェクトの存続に必須であることは、その構造上からもわかる。しかし、現在カリキュラム作成を行う上で、実際にその教育現場にいる生徒たちの様子が見えないことから、実際の声が継続的に発信されていないことから、研究室の学生のモチベーションを維持するうえで難しい。モンゴルと日本とゆう、距離的な弊害がかなり大きいといえる。また、2011 年度の活動には、これまで CBYL プロジェクトに特化していた上野研究室三回生の学生から、プロジェクトを新しく研究室に所属する二回生の引き継ぎが、必要となる。実際現地へ赴き、活動に働きかけた経験のない彼らのモチベーション維持は 2011 年度の活動でかなり大きく関わってくるといえる。また、CBYL プロジェクトで連携が必要となる上野研究室、Zorig foundation、第 58 番学校の各団体の役割が明確化されていないことは、運営におけるモチベーション低下につながっている。上野研究室が CBYL プロジェクトにおいて、どこまでの範囲の役割を果たすのか、また第 58 番学校の具体的な意向、Zorig Foundation が上野研究室にどの範囲の役割を求めているのかを確認する必要がある。そして最も継続性に問題だといえるのが、「上野研究室の存続」である。上野教授が 2 年後には関西学院大学を退職されることから、上野研究室は存続しない。上野研究室の代替として、CBYL プロジェクトにとって不可欠となる日本からの情報やツールの提供の役割を代わりに担う組織が必要である。

以上のように、CBYL プロジェクトには「持続性」の部分で様々な問題がある。現時点で、この具体的な解決策は見いだせていない。ひとつあげるとすれば、CBYL プロジェクトが終了する状況に陥った時を想定して、現段階から解決策を考えるべきであると考え。上野研究室の役割を担う組織が存在しなくとも、モンゴルの教育現場や Zorig Foundation 独自で、CBYL プロジェクトの理念に通じた活動が継続して行える状況をつくることも、上野研究室の役割だと考える。

## 6. おわりに

この夏モンゴルの地へ訪れて、筆者が目にしたゲル地区の状況は実際に想像していた以上にゴミであふれ、無秩序にインフラの整っていない地域で子どもたちが暮らしているという状況であった。中でも子どもたちが通う第 58 番学校の前にある枯渇した川には、大量の生活ごみ、中にはガラス、金属や骨など、子どもが歩くには危険だと思える状況は筆者にとって信じがたいものであった。現在のモンゴルのゲル地区の状況は、決して国レベルで早急に解決できる問題ではない。だからこそ、国民ひとりひとりが自分の身のまわりにある問題から解決する力の必要性を感じる。CBYL プロジェクトでは、将来のモンゴルを担う青少年を焦点にあて、その問題解決能力の育成を図る。民主化が進み、市場経済化で目まぐるしい変化をとげるモンゴルにとって、その能力はますます必要となってくるものであろう。上野研究室の学生が CBYL プロジェクトに最終的に掲げるビジョンとしては、

CBYL で学んだ子どもたちが、彼らが住む地方部、また都市部、経済などへ進んでいくべきときにその能力を発揮する、人材輩出にある。本プロジェクトで育った子どもたちがモンゴル社会の各分野において進出し、活躍するうえで、CBYL プロジェクトで学んだことを還元してほしい。またこのプロジェクトでの効果が、第 58 番学校だけには限らず、モンゴル政府に届きモンゴルの教育界の好影響へつながればと願う。最後に、私たちが発信しているプログラムは、試験的ではあるが、同じアジアの発展途上国内にコミュニティを育成する機会を提供するというものである。これは一方的な押しつけではなく、発展途上国の現地の人々を中心とした開発援助である。草の根レベルの活動ではあるが、大学生が発展途上国を訪れ、自身の価値観を揺さぶり、一つの政策を提言、実行するプロセス自体が、今後のグローバルな世界で活躍する人材を育てているきっかけになっているのではないだろうか。モンゴル国における、内なる成長を期待し、この CBYL プログラムをより発展させたいと思う。

### Vision~将来目標~

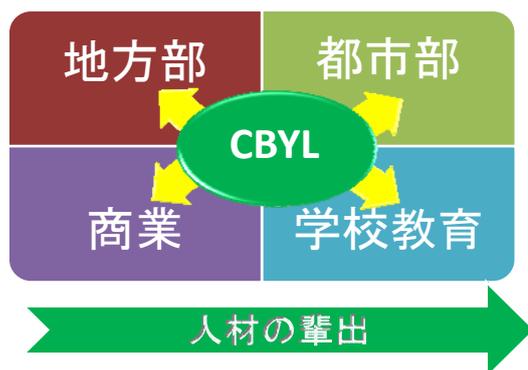


図 3 CBYL プロジェクトビジョンのイメージ

出所： 上野研究室(2010)

参考文献

石村卓也(2009) 『教育課程』 昭和堂 pp.122-185.

江 弘毅 (2006) 『「街的」ということ』 講談社

宮前 直美 (2009) 「モンゴルにおける社会体制 移行と教育政策の課題」 飛梅論集：九州大学 大学院教育学コース院生論

文部科学省(2010)「高等学校指導要領(平成11年版)」2002年3月告示 文部科学省 Homepage  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shuppan/sonota/990301.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301.htm)) (2011年1月現在)

国際ボランティア 21 「モンゴルの学校教育に関するインタビュー報告書」  
<[http://iv21.org/educational\\_issue\\_in\\_mongolia.pdf](http://iv21.org/educational_issue_in_mongolia.pdf)>  
(アクセス日 2011年1月10日)

UCRCA (2010) 「Community Buiding Youth Leadership project」  
<[http://www.ucrca.org/i\\_cbyl\\_program/](http://www.ucrca.org/i_cbyl_program/)>  
(アクセス日 2011年1月5日)

付録 1,Zorig foundation へ提示したカリキュラム(2010 年)

	実施事項	準備物	宿題
一週目	①クラブリーダー・副リーダーを決める。 ②紙にクラブでしたいことを書いてもらう ③クラブノートについての説明を受ける	人数分の紙	各自クラブノートを一冊作って次回持ってくる。 そのノートに自分が地域の中で問題だと思う事を書いてくる。
二週目	宿題を共有 設立記念として花を植える。 (定例活動とする)	花の種、苗 スコップ じょうろ	
三週目	まち歩き クラブノートに絵を書く 問題をノートに書く	カメラ	発見したこと、気付いたことをまとめる。
四週目	まちあるきを終わっての共有 みんなでマップ作り	大きな模造紙	
五週目	グループに分かれて、どのように調査するか考える→それを行動にうつす (ホロ訪問、教師ヘインタビュー、再度まち歩き等)		各自グループ内で決める。
六週目	新聞づくり	新聞用の模造紙	各自グループ内で決める。
七週目	新聞づくり		各自グループ内で決める。
八週目	クラブ内で各グループ発表。 その後、学校に提示		各自グループ内で決める。

付録2 第58番学校のカリキュラム

決定:											
スフバトル地区第58番学校						学校評議会 2010年9月					
総合マネージャー D.ハンダー						…日の会議により議決					
2010-2011年 スフバトル地区58番学校の時間割計画											
No	科目	1週間の(授業)時間 / 学年、学期 /									
		第1学年				.....	第11学年				
		1	2	3	4		1	2	3	4	
1週間		10	9	8	8		10	9	8	8	
1	必須科目	国語(モンゴル語)、文字	8	8	8	8					
2		国語(モンゴル語)、文学						3	3	3	3
3		文学									
4		英語						3	3	3	3
5		ロシア語									
6		数学	5	5	5	5		3	3	3	3
7		道徳									
8		歴史									
9		法律									
10		物理						1		1	1
11		地理						1	1	1	
12		生物							1	1	1
13		化学						1	1		1
14		政経						3	3	3	3
15		保健						1	1	1	1
16		体育	2	2	2	2		2	2	2	2
17		音楽	2	2	2	2		1	1	1	1
18		美術(工作)									
19		図面画法						1	1	1	1
20		技術						1	1	1	1
21		情報処理						1	1	1	1
22		人・環境	3	3	3	3					
23		人・社会									
24		人・自然									
25		美術(図画)	2	2	2	2					
26	選択科目	数学					4	4	4	4	
27		英語					4	4	4	4	
28		政経					4	4	4	4	
29		国語(モンゴル語)					4	4	4	4	
30		物理					4	4	4	4	
31		化学					4	4	4	4	
32		生物					4	4	4	4	
33	地理					4	4	4	4		
34	数学					4	4	4	4		
35	国民/教育	1	1	1	1		1	1	1	1	
		1週間の(授業)時間	23	23	23	23		37	37	37	37

8-p= 第8学年で、8-w = 第8学年の準備学年です。「準8学年」とでも訳すのでしょうか。

同様に、9-pは第9学年、9-w は「準9学年」という意味です。

付録3 実際に58番学校で掲示した模造紙

日本のコミュニティ紹介



日本紹介





クリーンアッププロジェクトの生徒たちの感想



## 4 - 1 政治外交チーム報告書

メンバー 井原 史章  
黒田 裕子  
横山 翔太郎  
横山 千尋

### 『はじめに』

我々、井原・黒田・横山翔太郎・横山千尋の四名は、モンゴルの政治や外交に興味を持つ者として集まった。まず、研修に行く前に考えたことは、モンゴルに行って何を調べるかということである。政治や外交について調べるのは勿論のことであるが、限られた時間の中でいかに効率よくどれだけの事を調べられるかというのが課題であった。当初はグループ毎の自由時間というものがあった為、それを軸に考えていくこととなった。

### 『研修前の準備』

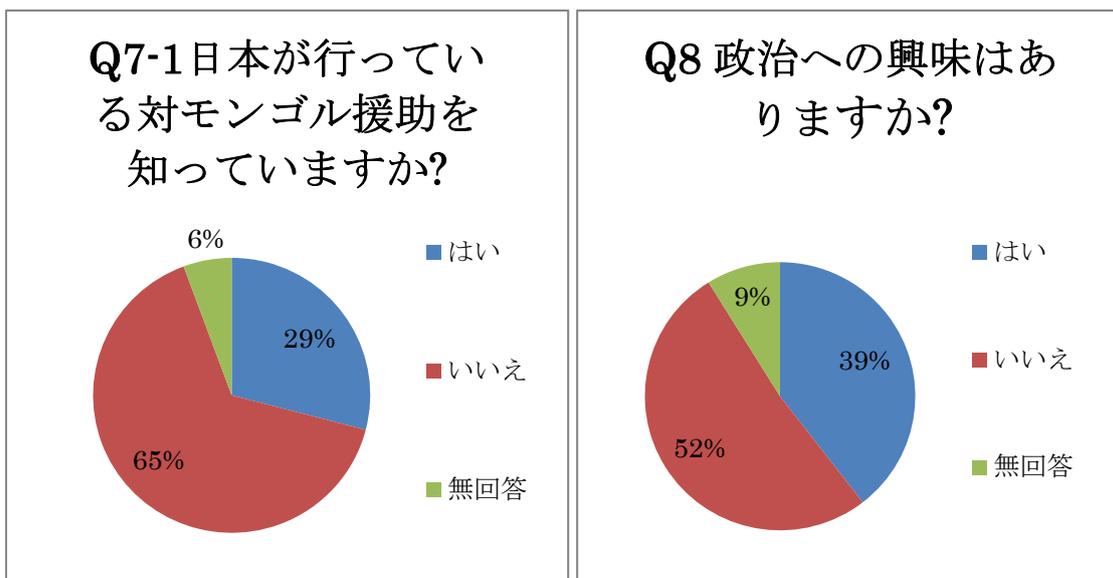
案としては様々なものが浮かんだ。JICA 訪問や日本から出資している企業への訪問などがその例である。政治と外交は緊密に関わっているため、訪問する場所としては一つの場所で両方の知識を得られる場所をベースとして考えた。結果として、JICA と大使館に絞ることとなり、双方に連絡をとった。JICA は二か月前までに連絡を取らなければならなかった為訪問は断念することとなったが、大使館は訪問の許可を得ることができた。ただし、途中で予定が変わり、政治外交チームとしてではなく上野ゼミとして上野教授を含む全ゼミ生で訪問する予定となった。

また、我々はモンゴルの民間人の政治や外交に対する意識に興味があった為、その調査方法としてアンケートを実施することとなった。内容や実施場所は四人で案を出し合って決め、初期段階では街角で通りがかる人々に 20 問程のアンケートを実施することに決めた。しかし、他にもアンケートをするチームもあった為、協力して行うこととなり、その為質問は半分ほどに絞り込んだ。また、研修前にアンケートをモンゴル語に翻訳していただく作業をどなたかに依頼する予定であったが、日程が合わず断念した。よって、翻訳は現地で通訳の人をお願いするということになった。その他に、アンケートを答えていただいた方へのお礼として、実用的なボールペン、鉛筆、日本の飴などを用意した。

## アンケート調査

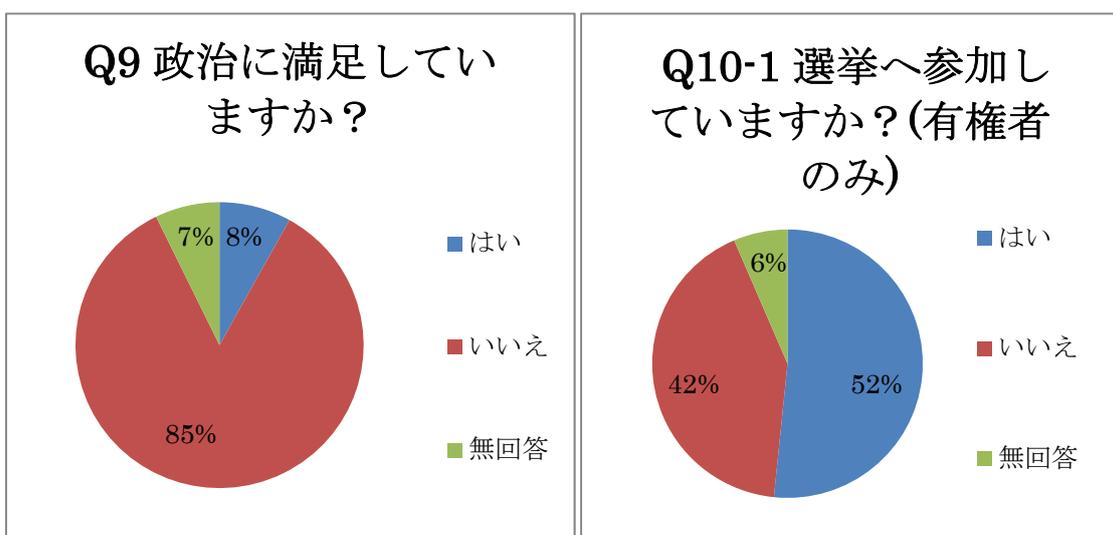
街頭アンケートは9月9日、13時～15時にスフバートル広場にて実施した。収集できた枚数は124枚である。

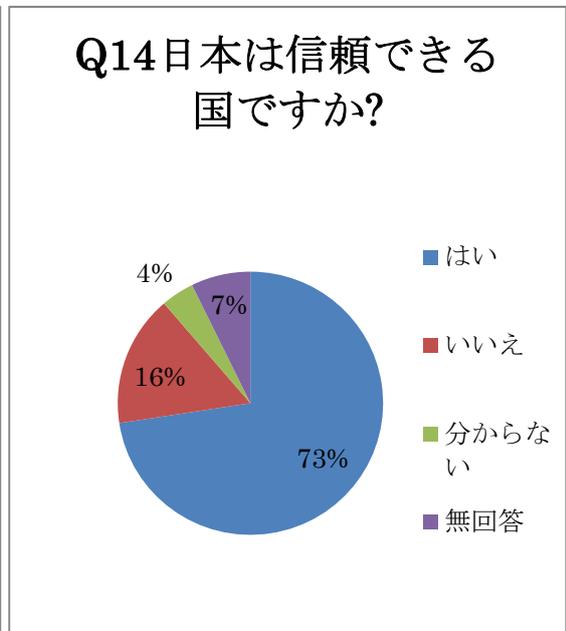
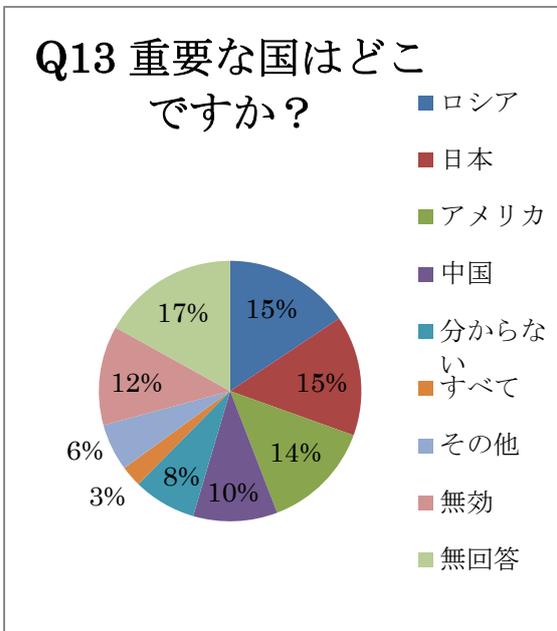
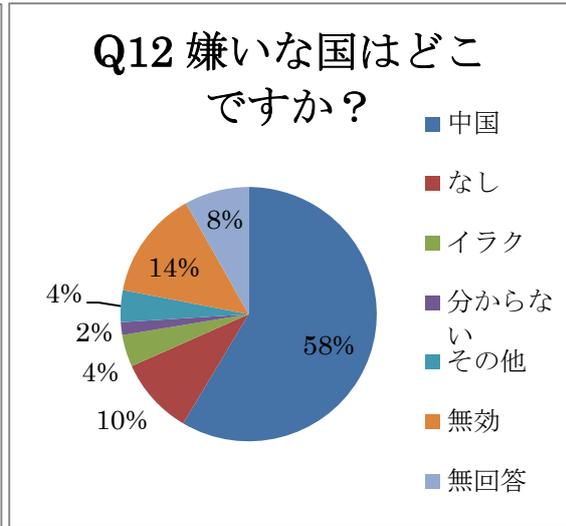
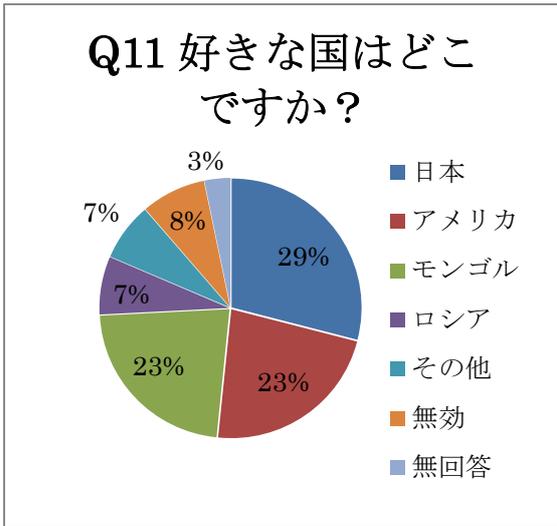
以下は、スフバートル広場において実際に行ったアンケートにおける政治外交チームの質問とその統計である。



Q7-2: 具体的な援助の内容を知っていますか?

JICA、ODA、医療機器の寄付、教育、農業、学校建設、草の根協力等が挙げられた。





### Q15 日本のイメージは何ですか？

先進国 29人

美しい国 13人

相撲 12人

誠実 9人

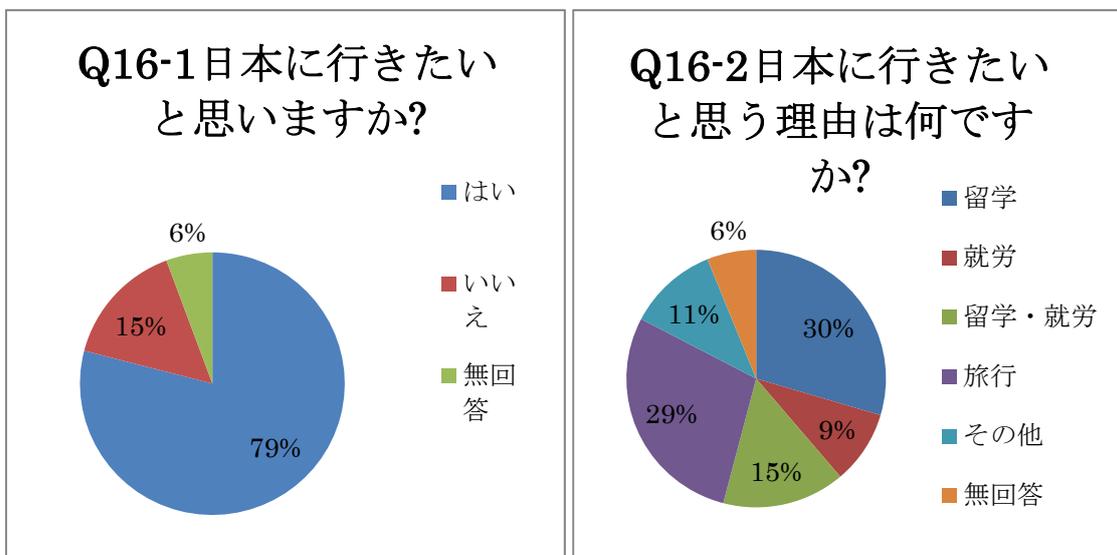
勤勉 5人

その他 22人

分からない 9人

無回答 25人

その他：桜、海、米、富士山等



#### 『アンケート調査実施後』

アンケートの結果を共有フォルダに保管し、Excelに入力する。アンケート調査をExcelやSPSSを利用し、分析し、グラフ化した。そこから見てきた日本とモンゴルの友好意識の相違に焦点を当て関西学院大学2010年度リサーチフェアにて研究発表を実施した。

#### 『研修における振り返り』

- アンケートを予想以上に収集することができた。(現地の対象者の方がアンケートに意欲的に答えてくれた)
- アンケートの翻訳などがスムーズに行えた。
- アンケート調査の翻訳に対する人員不足による翻訳者の負担が大きかった。
- モンゴルの現状について我々の知識が乏しかった為、アンケート項目の質に問題があった。

#### 『研修を終えて』

私たち政治外交班は、モンゴルの政治外交分野に焦点を当て、2010年度モンゴル海外研修を行った。モンゴルでは多くの方の協力のもと、アンケート調査を実施し、やり遂げることができた。アンケートの結果によると、モンゴル人が友好にすべきと考える国で日本は2位であるなど、日本を重要視していると考えられる。また、実際にアンケート調査の現場では、多くの方が積極的に調査に協力してくれるなどアンケート結果には表れないようなモンゴルの人達の優しさや、友好的な態度を感じることができた。実際にモンゴルへ行き、肌で感じたことを踏まえ、これからもモンゴルという国に焦点を当てて行きたい。

## 4 - 2. 環境衛生チーム報告書

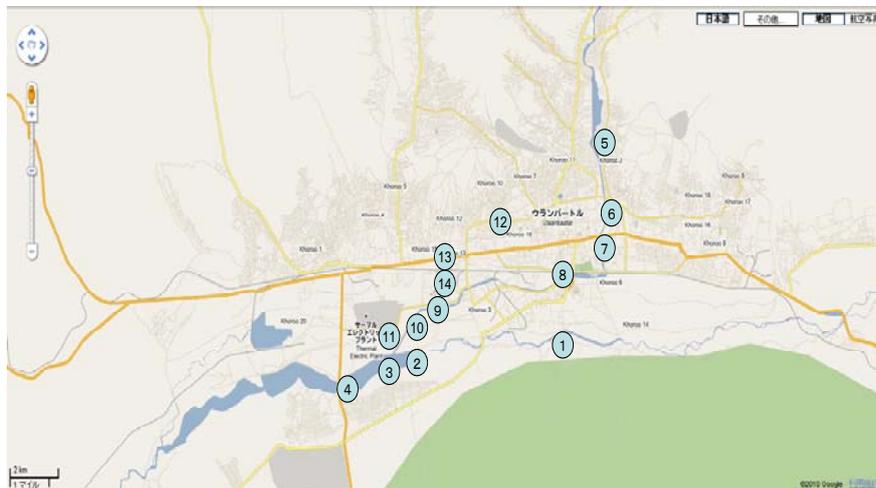
メンバー 上家 沙織  
李 鳳国  
劉 頤峰  
西堂 愛

### 1. はじめに

環境衛生チームは、モンゴルの水問題に焦点を当て研究を進め、モンゴルで実際に調査を行った。理由は二つある。一つ目は、日本とは全く異なった水使用状況に興味を持ったからである。モンゴル特にゲル地区では自由に水を使用できていないという現状がある。二つ目は、水は生命維持のために不可欠であるという4人の認識が一致したからだ。このことから生活する上で最も重要で身近に関わる水に対して、調査を行うこととなった。

モンゴルの水問題に関して事前に調べる中で、モンゴルの水汚染が深刻化していることがわかった。このことからモンゴルでは水質汚染調査を行うことに決めた。大阪女学院短期大学の中川准教授によると、水質汚染の原因は、地下水からしみ出た汚水と土地の表面を流れる排水の両方である。ゲル地区には下水処理システムはなく、さらに一般的に自分の生活のことしか考える余裕がないために、なかなか環境や将来世代のことまでは気がまわっていないという現状がある。以下は参考資料である。

## 調査地(2005年6月29日)



### 調査地名

①トール川(ザイサン丘に行くときに渡る橋の下)、②ドント川合流直前、③ドント川合流直後、④絨毯橋(仮称:住民がここで絨毯をよく洗うため)、⑤セルベ川上流、⑥スカイショップ・チンギスハンホテル前、⑦平和橋の下、⑧カンミア・ゴビ工場裏、⑨排水路合流直前、⑩ドント川排水路合流直後、⑪ドント川最下流(トール川との合流直前)、⑫ホワイトハウスホテル付近の排水路、⑬メイン道路付近の排水路、⑭ドント川合流直前の排水路

図1 モンゴルの調査地

提供者: 中川雅博

# ウランバートルの水質概要



図 2 水質調査の結果

提供者：中川雅博

また水質汚染に対する啓発活動として、現地での意識調査とアクリルたわしの配布を行った。意識調査は水に関するものを主に街頭・大学生・高校生を対象として行った。水に対する意識改善の啓発のためにアクリルたわしを作製し、ちらしと共にアンケート協力者に配布した。なお、アクリルたわしは約 110 個配布した。右の図は上記のモンゴル語のチラシである。



## 2. 水質調査に関して

### 1. 調査方法

- 簡易の COD パックテストを用いた

### 2. 調査場所・調査結果

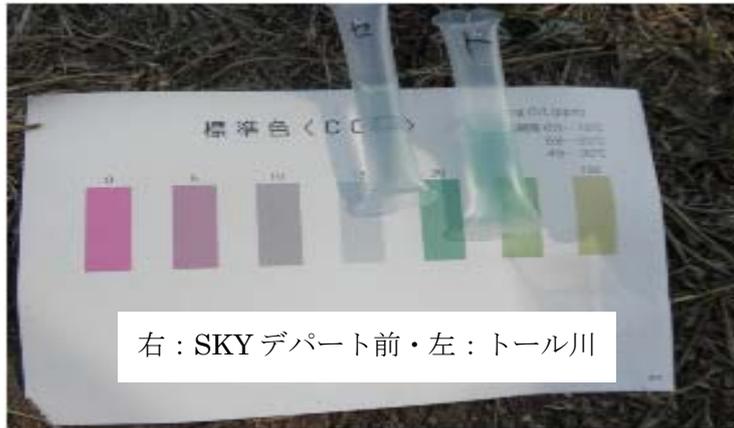
#### A) 58 番学校近くの川(湧水)



B) SKY デパート前の川



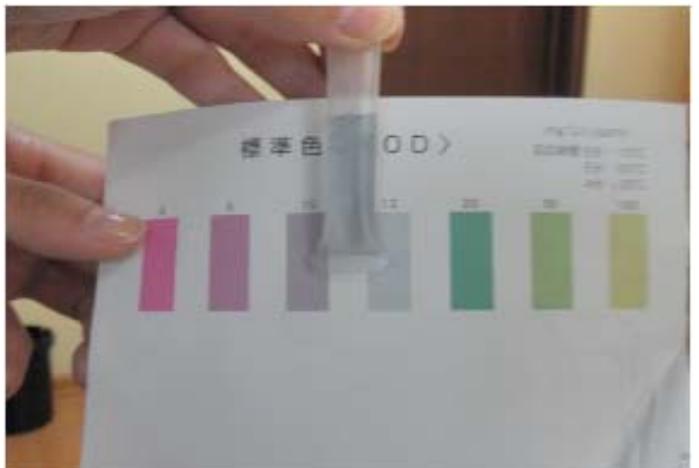
C) トール川上流



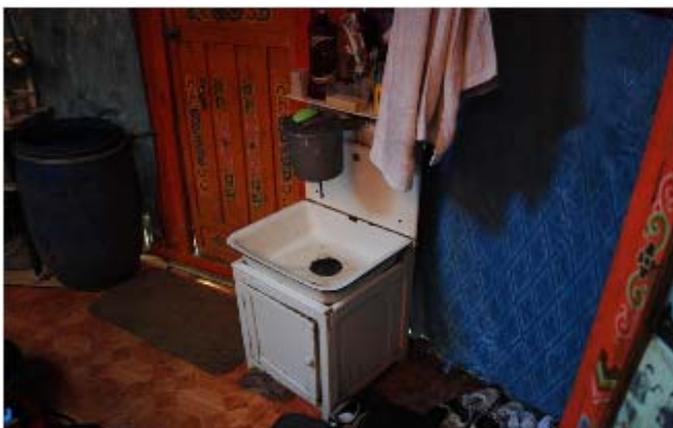
D) CMD ホテル水道



E) 坂上・横山ステイ先



## F) 藤元・横山ステイ先



今回の調査では、当初川の水質を主に調べる予定であったが、対象としていた川が枯渇しており、調査を行うことが出来なかった。そのため主に生活用水に焦点を当てて調査を行った。温度計や地図等の機材の不備があり、その場での検査が困難な場合にペットボトルに入れて水を持ち帰る等も行ったため、正確性に欠ける部分があった。また、われわれも水質に関する十分な知識がなく、今回の調査が有効であったかに関して疑問が残った。しかし今後きちんとした準備と十分な知識の下調査を行ってみる価値はあると考えられる。今後同様の調査を行う際には教授の協力を得る必要があると考える。

### 3. アンケート調査に関して

対象：モンゴルの高校生:85 人

スフバートル広場：124 人

エルフオルチロン大学学生：63 人

ホームステイ先：23 人

#### 1. いま使える水の量に満足しているか？

はい：195 人

いいえ：95 人

無回答：6 人

#### 2. 水を使うとき、節水を意識していますか？

何も気にせず使っている：3 人

節水を気にするが何もしたことがない：53 人

節水を気にしているし、少し実行している：165 人

毎日節水を実行している：69 人

無回答：5 人

#### 3. 水源地を知っているか

はい：158 人

(トール川 55 人 川・池 16 人 地下水 14 人 井戸 23 人 その他 13 人 無記入 37 人)

いいえ：126 人

無回答：11 人

4. 今後資源としての水はどうか

あり続ける：11人

減るがなくなる：84人

いつかなくなる：193人

無回答：7人

5. 汚れている川をきれいにするならいくら払うか

0～2000tg：57人

2000～5000tg：75人

5000～10000tg：61人

10000tg以上：82人

状況に応じる：6人

無回答：14人

6. あなたにとって水とは（自由記述）

ダイヤモンド：16人

宝物：97人

大切なもの：8人

その他

4. おわりに

私たち上野ゼミは2010年9月1日から11日までモンゴルで海外研修を行った。ゼミの中で私たちは4チームを分け、各自やりたいことを分担しながらやって来た。そこで、私たち四人は環境衛生に興味を持ち、一緒にモンゴルで調査を行うことにした。

まず、モンゴルに行く前に都合上あまり集まる時間を作れなかった。また、テーマを決めることにも時間がかかってしまい、なかなか準備が進まなかった。調査をする段階でも、事前調査が不足しており、行く前に環境衛生に関する情報や知識などをもっと調べていくべきだった。本来であればゼミの海外研修なら、行く前にしっかりと現地に関して情報を得て、チームワークで各自仕事を分担しながらやるべきだった。一人ひとりが調査に関して責任を持ち、事前に調べたりすることで防げたと考えられる。今後このような調査を行う際にはきちんとした体制で臨むべきであるとする。

## 5. ホームステイ報告書

### 1. はじめに

2010年度上野ゼミはモンゴル研修の際、ゲル地区の家庭でホームステイを行った。実施の目的・経緯についてこの報告書をもって述べる。

### 概要

期間： ホームステイは、モンゴル研修中の9月※日の夕方～翌日の午前中

参加者： ゼミ生9名、通訳者5名、協力家庭5戸

場所： モンゴルウランバートル市内のゲル地区

### 目的

上野ゼミは2006年度から毎年モンゴルでの研修旅行行っている。われわれの目標は、教授の言葉にある「世界市民」になることである。そのためには、自国とは違う環境を見て、行動する必要がある。また、途上国支援を行う国際機関の職員は、現地の生活を知るため、ホームステイ経験を必須条件とされているようだ。したがって、モンゴルの都市問題を研究する上野ゼミ生にとっても、現地の生活を肌で感じるため、ホームステイ経験は意義のあるものだと考えた。

### 実施の経過

#### ・序盤

中川雅博教授（大阪女学院短期大学の準教授）にゲル地区でのホームステイの希望を相談したところ、知り合いであるジャガーさんの連絡先を教えてもらうことができた。これが始まりである。ジャガーさんとは、メールのやり取りでホームステイを計画していった。四人が体験可能だった。現地でホームステイの希望が十三人募った。ジャガーさんの知り合いであるジャブザさんの協力のもと、急遽、通訳者四名、ステイ先四軒が見つかり、希望者全員がホームステイ参加できるようになった。十三人中二人は安全を配慮しホテルで待機することになり、計十一名が参加した。

#### ・中盤

右図のように、二人に一人通訳がつき、ホームステイすることになった。一人10000Tg用意し、通訳者・宿泊先に各10000Tgをお礼として用意した。

#### ・終盤

上野教授、ホテルにいたゼミとともにそれぞれのゲルに迎えに行った。家族との別れの挨拶ができなかったところもあるが、中には泣き、別れを惜しむところもあった。各々が各々の思い出を作り、満足のいくプログラムの一つだった。

通訳者	ゼミ生
1.ブルネさん	坂上・横山翔
2.ウランゴさん	奥村・中谷
3.サマーさん	藤元・横山千
4.トヤさん	李・多田
5.ジャブザさん	上家・岡田
6.ジャガーさん	西堂

## ホームステイ 1 坂上勝基

### ▶ 家族



両親と3人の子供から成る5人家族。お父さんは39歳で、昔は運転手をしていたそうだが、現在は中古車を買って、修理して販売する自動車ディーラーとして働いている。私たちのホームステイ中は夜11時過ぎに帰宅し、次の日の朝9時前には仕事に出かけていった。お母さんは33歳で、専業主婦と言っていたが、デパートの店員として週2日くらい働く時もある様子だった。

3人の子供の一番上は14歳の長男。2番目は12歳の長女で、末っ子は6歳の次男。次男はつい最近1年生となって学校に通い始めたばかりのやんちゃ盛り。家から20分くらい歩いて行ったところには父方のおじいさんの家があり、子供たちは頻繁に行ったり来たりしているようだった。

今は庭で野菜作りもしている父方のおじいさんは、ザブハン県から若い時にウランバートルへ出てきて運転手をしていたと言っていたし、お母さんは自分の両親のふるさとは、アルハンガイ県だと話していた。おそらく父方、母方とも、子供たちのおじいさん、おばあさんの代に地方からウランバートルへ引っ越してきた家族だったのだと思う。

### ▶ 住居



通訳さんの話によるとホームステイ先のゲルがあったのは、中心部から東へ30km以上離れたウランバートル市郊外。ハシャの外に出ると、トーラ川の清流を臨む美しい景観が眼下に広がる。

一家は主要道路に近いあたりから10日ほど前に引っ越してきたばかり。ハシャの中にはゲルが一つあるだけで、まだ電気も通っておらず、夜は蝋燭の火で明かりをとっていた。電気はすぐにひいて、将来的にはハシャの中に家を建てる計画なのだとお母さんは話していた。

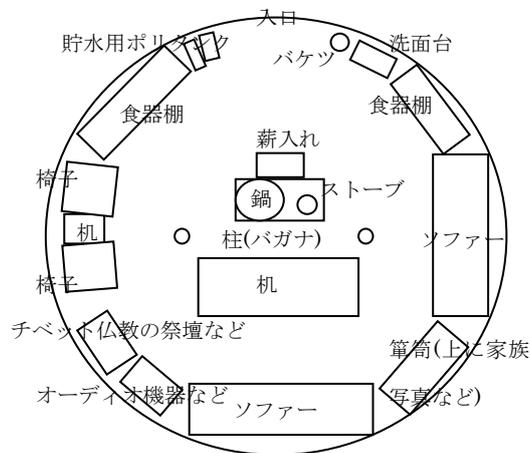
ゲル内の家具などの配置は右に示す。

### ▶ 食事

夕食にはモンゴルの伝統料理であるボーズが振舞われた。中身は牛肉で、スーパーで買ってきたのだというキムチや野菜とよくあって、とてもおいしかった。

朝食は、スーテーツイにお米が入ったお粥。お母さんは朝7時くらいには一人起きて、鍋いっぱいツイをこしらえていた。

トーラ川で釣った魚を食べることもあると話していた。



### ▶ 水・トイレ・暖房



家から15分ほど行ったところに井戸があり、3日に1回、一度に40~80リットルの水を運ぶのは長男の仕事だと言っていた。写真の建物の中にある蛇口をひねると、桶から水が流れてくるそうである。貯水タンクとつながっているのか、ゲル内の洗面台の蛇口をひねると水が出てくるようになっていた。子供たちは喉が渇くと、貯水用のポリタンク

から柄杓で水を取りだしてがぶ飲みしていた。

トイレは掘ったばかりという3m近い深さがある穴に板で足場を作り、周りをブロッ



ク塀で囲ったものだった。

ストーブの燃料である薪や石炭を買うのにかかる費用は年 30 万 Tg にもなり、大変な出費だとお母さんは話していた。

#### ➤ 学校

ホストファミリーの子供たちは、毎日 30 分かけて学校に通っていた。授業は 2 部制で行われており、お別れの日の朝、一番腕白な末っ子はシャボン玉遊びをしながら、午後から始まる学校の宿題に追われていた。

お母さんの話によると、5 年生から英語の授業が、7 年生からロシア語の授業が始まるそうである。授業料や給食費は払わなくてよいが、教科書は買っているということだった。

#### ➤ 全体を通した感想

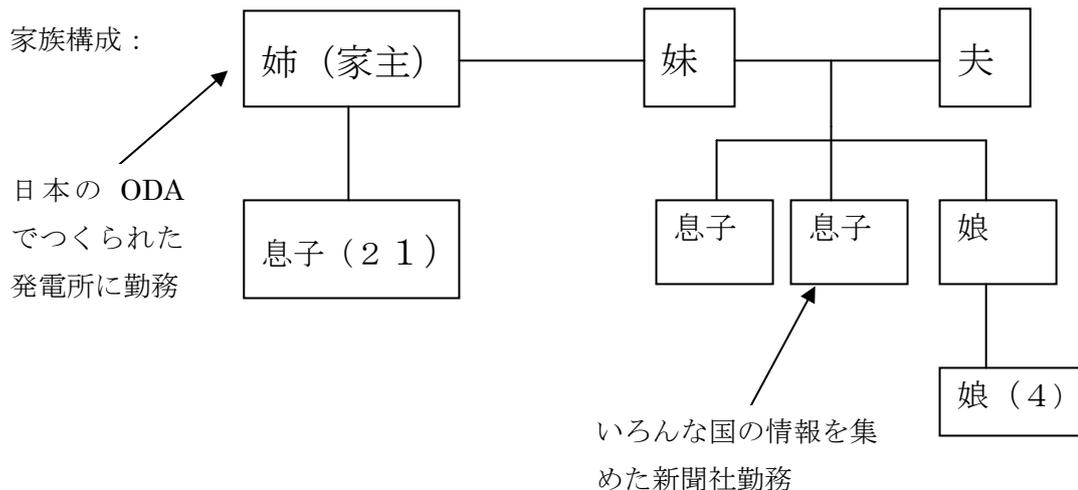


まず私が感じたのは、雄大な自然に囲まれた暮らしを心から愛し、誇りにするモンゴルの人々の熱い思いである。今回泊まることが出来たゲルは、多少交通の便が悪くなくても、眺めがよく空気のきれいな土地を求めて引っ越してきたばかりの新居だった。見渡す限りの草原を駆けまわる子供たちの笑顔や、「日本ではこんなに星は見えないの?」とほほ笑むお母さんの満足そうな表情を眺めていると、水道や暖房などインフラの整備が追いつかなくても、郊外にゲル地区が拡大していくばかりの理由が分かるような気がする。

しかしその一方で気になることもあった。洗面台には石鹸が置かれ、ゲルの中には市の中心部から買い込んできた生活用品が並んでいるが、住居に十分な下水設備が備わっているとは思えない。また、家の近くには土に還ることはないであろうゴミの山があたり前のように放置されていた。

一晩という短いホームステイであったが、ゲル地区で暮らす家族の方々の心の温かさに触れるとともに、ウランバートルの都市問題に対処する難しさを考えさせられる貴重な経験となったと思う。





服装：みんなカジュアルな服。家にいる時は、楽な服装だったが、仕事に行く時は、おしゃれを（化粧も）していた。

二つのゲル

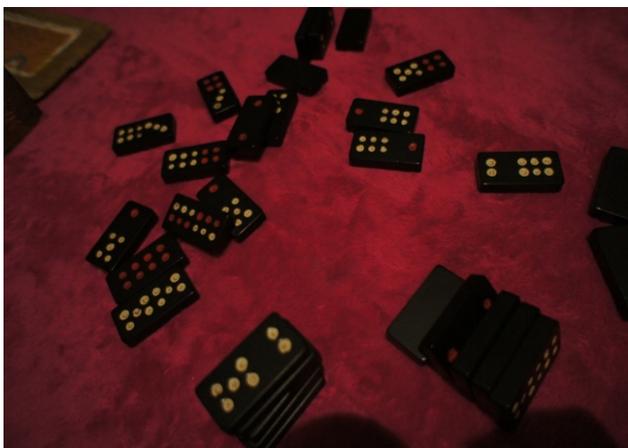
ゲルの中：ベッドや冷蔵庫、タンス、テレビなどがあつた。



お母さんの妹の旦那さん。たくさんのお話をしてくださった。特に印象的だったのは、写真にある、草原の中の岩の絵。遊牧民の人たちは、強い風よけになるこの岩に尊敬の意を持っている。お客さんがゲルに来た時には、左から入って、この絵に礼をし、右からでるということを教えてもらった。

夜ごはん：羊の肉、じゃがいも、キムチの炒め物、野菜（野菜は、近所にあるビニールハウスで採れたもの。近所の人たちと共同で野菜を育てている。）

近所のビニールハウス ↓



モンゴルの伝統的なゲーム

感想：私たちの宿泊が急に決まったのにもかかわらず、すごく温かく受け入れてくれて、本当に嬉しかったです。日本では考えられないなあと思いました。モンゴル人は本当に心が温かく、家族の絆を大切にしているということを学びました。行く前に、モンゴルについて、本やインターネットでたくさん調べましたが、このようなホームステイで得たものは、インターネットや本などでは、知ることができないものです。改めて、自分で体験し、自分の目で見て、学ぶことの大切さも知ることができました。このような経験をして、モンゴルや日本、家族の繋がりなどたくさんのことを学び、知ることができたので、その経験を自分の家族や友達、たくさんの人に伝えたいと思いました。そして、たくさんの人にモンゴルについて知ってもらいたいです。

【家の形態】 ハシヤに囲まれたゲル

トイレはゲルの外にあり、簡易的なボットン便所で、囲いがあった。

【家族構成】

6人家族

父 ナルマントホ (44) 職業 建築 現在は無職  
母 オットコンバヤル (44) 職業 看護婦  
長男 シーネフ (20) 市内で働く  
次男 シントウル (15) 学校  
長女 ナランゾラ (19) 市内で働く  
次女 ジーナ (ナランツァツフル) (10) 学校 ダンスが得意



【ゲルの中】



家の中には、  
テレビ、ラジカセ、  
冷蔵庫があった。

【食事】

夕食→うどんのようなものと羊肉が入ったスープのようなものであった。

朝食→ニンニク入りのスープと、伝統的なミルクティーと手作りのパンにブルーベリーのジャムであった。

【服装】

日本人とあまり変わらない服装であった。ジーナはキティちゃんのTシャツを着ていた。

【動物】

馬四頭、犬二匹 (一匹の祖父はオオカミ)、



## 【全体的な感想】

私たちがホームステイしたゲルの家族はお金に困っており、生活が苦しいようであった。

昨年のゾド(雪害)によって家畜が全部死に、父は今無職であった。

また、次女のジーナはダンスが得意でウランバートルのダンススクールに入学する権利が得られたのに、貧乏のせいで入学することができなかったそう。長男と長女もお金がないので大学に行くことができず市内で働いていた。しかし、家族全員の仲の良さを強く感じた。

ジーナと私たちは、モンゴルにおいて伝統的な家畜の骨を使ったゲームをした。家畜の骨によるゲームがあるとはモンゴルらしく、日本の文化との違いを感じた。

一番不便に感じた点は、トイレである。夜になると懐中電灯なしではトイレは難しく、また虫も多くて、不衛生であると感じた。

家族の人たちは私たちにモンゴルの伝統的な衣装を着せてくれた。



このホームステイではモンゴルの伝統的な暮らしを体験でき、家族の優しさと温かさを感じた。また、モンゴルで問題になっているゲル地区の貧困問題を感じさせられた。

### 家族構成

家に住んでいるのは3名で、父・母・娘の3名が住んでいました。ほかにも結婚した娘が1人おり、お子さんがいて、頻繁に会っているようでした。わたしがステイしたときにも、遊びにきてくれて、娘さんの10カ月の赤ちゃんを中心に、みんなで仲良く過ごしていました。

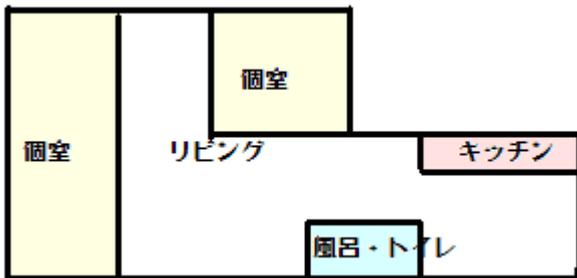
### 年齢

お父さんお母さんは45歳、娘は21歳と16歳

### 職業

夫婦一緒に、韓国の車を輸入し、モンゴルで売るとい車ディーラー

### まどり



### ハシヤの内

ハシヤの内はとても広くて、夏に使う母屋がひとつ、もうひとつ家もありました。防犯用に犬も飼っていました。

### 食事

韓国料理のチゲ鍋を食べました！韓国で本場の味を仕込まれたらしく、辛かったです…

### トイレ・お風呂

トイレと風呂は同室にありました。キオスクなどを利用しておらず、蛇口をひねれば水が出ていて、お湯・トイレットペーパーすべて日本のものと変わらない様子でした。

### 水の使い方

量など気にせずに利用していました。洗濯機もあり、浄化機もありました。先進国にいたからなのか、モンゴルの水の汚さを本当に気にしていて、料理でも使わないとおっしゃっていました。

### 服装

お風呂後はバスローブを着ていました！服も全部韓国で買って来たそうです。

### 感想・その他

ゲル地区といえば、アパート地区と比べ貧しいためゲル地区に居住しているという概念がありましたが、この家はアパート地区の中でもとても裕福な家だと思いました。家具・電化製品がすべて整っており、水道・食料において、すべて満たされた生活をおくっているようでした。それは職業にあるのだと思います。1997年代に韓国に進出するとお金が儲けられるという話を聞き、夫婦は韓国に飛んだそうです。韓国ではあまりかせぎがなかったそうですが、モンゴルへ帰り、韓国で得た車の売買のノウハウによって、お金を稼ぐことができたといいます。アパート地区に住まない理由は、高級な家を構えることに重点を置かず、旅行や娘のために重点をあててお金を使いたいという夫婦の思いがあったからだそうです。ものに満たされた生活よりも、旅行や娘のよい成長にお金を使おう！というのがお二人の強い思いでした。

## ご夫婦とお話をして

この夫婦の印象としては、「発展的な考え方をもっている」というものでした。

韓国という先進国で6年過ごしたこともあり、徹底されたインフラ・人々のモラルなども、2人の考え方は一度先進国を見たからこそ、出た発言が多くありました。モンゴルが嫌いですか？と尋ねたところ、自分の育った国だから、嫌いだというわけではない。モンゴルのよいところは「自然・歴史」。しかし、モンゴルに対して様々な不安がある。食べ物は中国のなかで最低商品がモンゴルへ来るから安心できない。(中国の良い製品は日本・韓国、先進国へ輸出そうである) 道路が老朽化していて、交通整備が整っておらず、罵倒されたりする。政治は国民のためにお金を使っていない。日本などの様々な国からくるODAを使っていない。一度先進国を見て、比較対象があるので、モンゴルの問題を強く感じておられました。

## 家族について

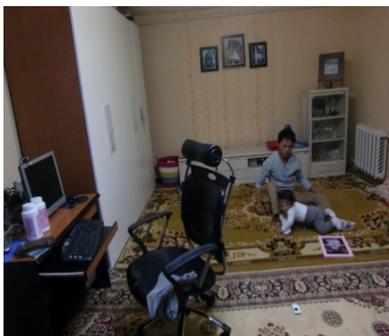
私のこの家で感じたことは「家族の温かさ」です。日本はこれだけお金やモノに満たされていると、家族のつながりがうすれていくのではないかな。というのが私の考えでした。しかしこの家は休日は家族で出かけることが多いらしく、またたくさんご夫妻が家族について話している様子から、本当につながりあって支えあって生活をしているのだなと感じました。「義理の息子は本当の息子」というテコンドーで韓国の大会で優勝した娘さんの旦那さんの話を笑顔で嬉しそうに話しているのも印象的でした。

温かな家庭で素晴らしいご夫妻を中心に、楽しい1日ステイを体験することができました。



↑電気製品はばっちり。

↑冷蔵庫の中にはお肉がたくさん



↑広い家

↑部屋の中のものはすべて韓国製だそう。

↑家族団らんの様子

・家族構成

父タイワン、母アマラ、娘、息子アノロの4人家族。同じハシャの中には、他にゲルが二つあり、一つは父タイワンさんの弟夫婦、もう一つはそのお嫁さんの両親が暮らしているそうです。滞在中は隣の弟夫婦の子供3人が遊びに来ていて、とてもにぎやかでした。

・職業

父タイワン：運送会社でトラックの運転手として働いている。

いつも帰りが遅く、私たちが滞在した日も10時ごろに帰宅していました。

母アマラ：薬局に勤務している。

・移動手段

車を所有しており、父タイワンさんが奥さんと子供を職場、学校へ送っていくそうです。モンゴルの交通事情はあまりよくないので、タイワンさんがいないときにはバスなどの公共交通機関を使うと言っていました。朝6時半には起床し、7時15分には家を出るそうで、私が起きた時にはすでに出発しており、きちんとお別れができず、後悔しています。

・1日の過ごし方

ステイ先の方とはあまり話をする事ができず、母アマラさんの妹であるジャブザさんに質問をしました。

以下ジャブザさんについて。(職業：翻訳家)

8時 起床

9時 家を出る

14時 昼食(食堂あるいはレストランにて)

※モンゴルにはお弁当の習慣がないそうです。

19時 帰宅

・トイレ

屋外にあって、日本のぼットン便所と同じ形式。木の板でうまく足場を確保してあるが、電気がないので夜には懐中電灯が必須。家族の方は、夜は危ないのでハシャ内の草むらで用をたすそうです。

・お風呂

家にはお風呂がなく、週に3回近くのおばさんの家にシャワーを借りに行くそうです。モンゴルは日本と比べて、とても乾燥しているので毎日入らなくても大丈夫なようでした。

写真



部屋の中の様子



クッキーとジュース、チャイをいただきました

子供たちとの一枚

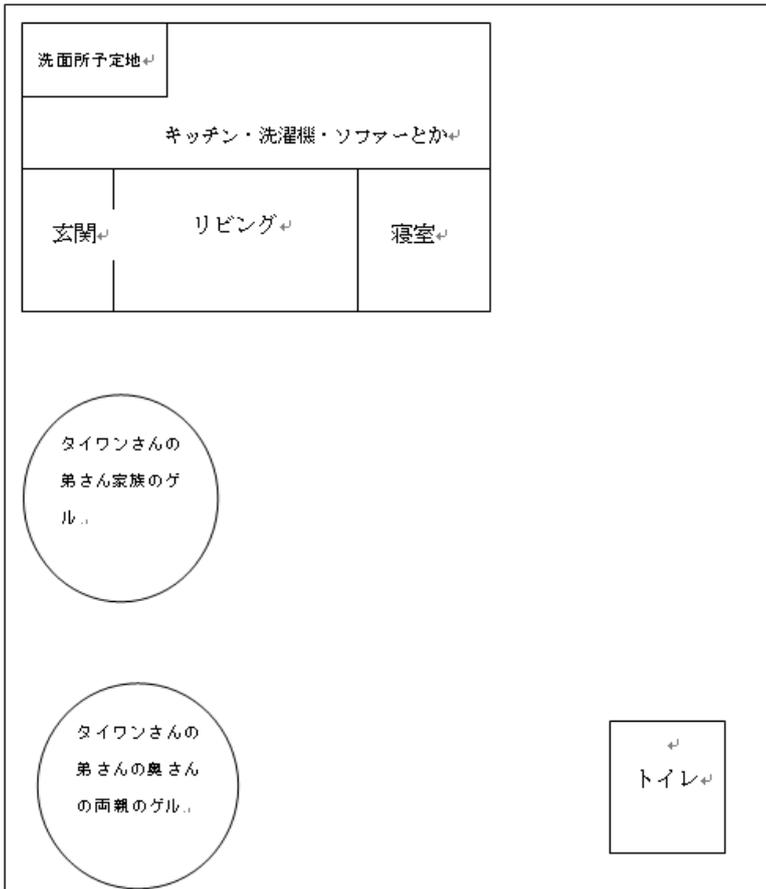


玄関にて



ハシャ内の様子

ハシャ内と家の間取





▶ 家族構成一父、母、姉妹の4人

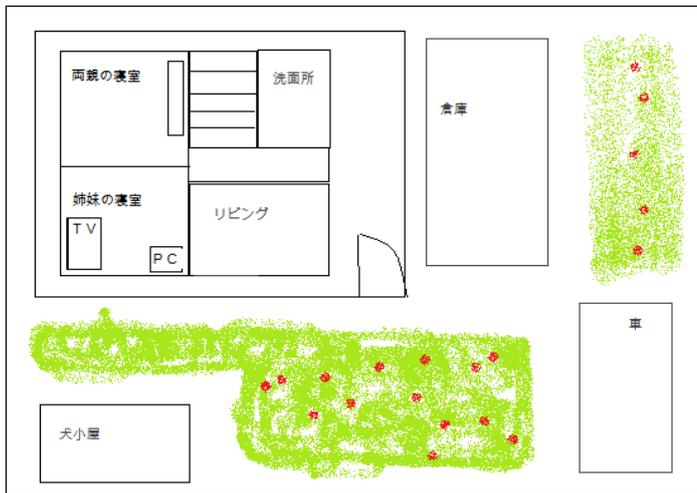
父親は、かつて大工さんとして働いていたが、今は仕事を退職し、今は自宅の庭の整備を日課としている。

母親は、娘ジャガーさんが作った会社で働いて、その会社では、中国からの輸入品や自分たちが作った展示品などを販売している。また、コピー機を置き、利用者からお金をもらっている。

姉ジャガーさん（写真右）は、モンゴルにある大学で日本語学科を専攻していた。仕事は、主に観光客の案内やある企業に所属し、日本語のテレホンサービスで働いていた。今は新たな

仕事を探しているところだ。妹は、私と同年でモンゴルの大学で宗教学を専攻している。

▶ 住宅



かつては、第二の都市ダルハンで暮らしていたが、娘の大学進学のためウランバートルへ移住した。今は、ダンバダルジャにあるゲル地区に住んでいる。住宅は、大工であるお父さんが設計し建築したそうだ。緑の門を開けると、かわいらしい一軒家で庭がある。庭には犬猫がいたりコスモスが咲いていたり、ブルーベリーのような果物の実も育てていた。ヨーロッパのような雰囲気漂っていて、とても素敵な住まいだった。

家の中はというと、二階建てになっている。一階では3LDKになっていてリビング、両親の寝室、姉妹の寝室がある。リビングは白い食器棚やスト

ープ、冷蔵庫、炊飯器、電子レンジがある。すべて中国から輸入したものだ。

また、キオスクから買って来た水が入った樽をキッチンに収納できるように設計され、重い樽を持たないように台の中にローラーをつけ、簡単に収納できる工夫がされていた。

両親の寝室には、ダブルベットが一つある。反対側には液晶テレビが壁につるしてあり、寝ながらも見るようにしている。姉妹の寝室にはPCやソファがありソファの下にベットが収納されていた。

また洗面所には、トイレ&バスタブも設置されている。これらの水は地下から掘り出したものだ。地下水には限りがあるため、トイレは真夜中や冬の寒い時期の外に出るのがおっくうな時に使われる。

このように家の中には様々な工夫が凝らされている。お父さんの家族への温かい心の配慮が必要だろう。



➤ 生活用水



生活用水はキオスクから買っている。キオスクでは60L=60Tgで週に2,3回買いに行くそうだ。この仕事は従来から子供の仕事だと決まっている。私も実際にキオスクへ水を汲みに行ってみたが、足場は砂地で不安定で運びにくかった。冬は土が凍るし余計に困難らしい。しかし、現地の子どもたちの楽々と運んでおり、楽しそうにしゃべったり遊んだりしていて、キオスクは集まりの場にもなっているのだと感じた。

## 6. おわりに

モンゴル研修報告書を作成していく過程で、2010年度の上野研究室の活動を振り返ると、ゼミ生で研修の目的を決めていた2010年6月のことを思い出す。「自分たちのために。モンゴルの若者のために。」2010年度モンゴル研修はこれを軸として始まった。モンゴルの政治外交、また日本とモンゴルの国際関係に興味のある面々が集まった政治外交チーム、モンゴルの環境問題、特に水問題に焦点をあてた環境衛生チーム、上野教授と Badruun 氏の一声から始まった CBYL プロジェクトを進めていくモンゴル教育チーム。自分たちが研究したいテーマを扱い、何がしたいのか、またそのためにどのように調査するのか、チームの中で思いをすり合わせて夏期研修のプログラムを作成していった。「モンゴルのために、何か少しでも残そう。」その思いを胸にモンゴルの地へ降りた。しかし、私たちは実際なにかを与えられる存在ではなく、与えられたことのほうが多かった。モンゴル人の優しさに触れ、大草原の中で満天の星空をはじめて目にし、自分たちが実施したいことをたくさんの方の力を借りて実現することができた。モンゴルの文化や人々の暖かさにより、未だかつて経験したことのないことに挑戦でき、また成長できた。多くの方のおかげで、今年度のモンゴル研修は実現できたのだと、感謝の気持ちは計り知れない。

私たちはモンゴルへ何を返せるだろうか。私たちが成長させてくれたモンゴルのために日本でなにか貢献したい。その思いは2010年11月の研究発表やのモンゴリアウィークへ反映されていく。また、CBYL プロジェクトのこれからの活動に尽力することで、モンゴルの明るい未来の小さな力になることを信じ、2011年度へ、その活動を後輩たちへつなげていきたい。

最後に、私たちの活動に力を添えて下さったモンゴルの方々をはじめ、研修に関わったすべての方に、心から感謝を述べたい。

2011年1月  
多田 渚

## 名簿

教授

上野 真城子 Prof. Makiko Ueno

アドバイザー Advisor

Mr. Badruun Gardi (Zorig Foundation)

3 回生 (\* 研修参加者)

井原 史章 Fumiaki Ihara

多田 渚 Nagisa Tada

上家 沙織 Saori Kamiya

岡田 真由香 Mayuka Okada

山見 玲加 Reika Yamami

藤元 惇一 Junichi Fujimoto

李 鳳国 Fengguo Li

横山 千尋 Chihiro Yokoyama

黒田 裕子 Hiroko Kuroda

劉 顕峰 Xianfeng Liu

中谷 昌彦 Masahiko Nakatani

西堂 愛 Megumi Saido

横山 翔太郎 Syotaro Yokoyama

奥村 美也子 Miyako Okumura

4回生

坂上 勝基 Katsuki Sakaue

特別参加

島末 喜美子 Kimiko Simasue

島末 ひとみ Hitomi Simasue

---

### モンゴル研修報告書 2009

### 2009 Study Tour, Mongolia

編集: 関西学院大学総合政策学部上野研究室 2009 年度研究演習 I

刊行: アジア都市コミュニティ研究センター (UCRCA)

刊行日: 2010 年 3 月 3 日

〒669-1337 兵庫県三田市学園 2 丁目 1 番地

TEL/FAX: 81-79-565-8157 E-mail: [makikomueno@kwansei.ac.jp](mailto:makikomueno@kwansei.ac.jp)

URL: <http://www.ucrca.org>

School of Policy Studies, Kwansei Gakuin University.

1 Gakuen 2 chome Sanda, Hyogo 669-1337 Japan

---